



著作堂西羈旅漫錄
乾

其二

ル 4
3496
1





著作
堂西羈旅漫錄
乾

篋竹三雨淡書馬琴作之板本あり此西羈旅漫錄ヲ
取捨して印刷セルモノ



ル3
3126
1-2



昭和九年
十月八日
購求

享和二年壬戌五月九日江戸発足
同年八月廿四日江戸帰宅

近年戯作者と稱するもれ世小町行し彼莊子が寓言と
曾魯利と頓作と云ふ新古の巻物ともれくしくと懲り
カトス四史のしくしくと世に用ひ吹らす蛇の登天と
の虚作まらしくや敵討奇法怪談弁解晒後等の戯作
年小とに刊布せるもの少くびとあるは幾と凡そ支那の作者
と一両葉にさびは先哲の糟粕と當身又々博識の論議已
有とある者のこまり只餘をくくを小女兒の目と収めぬ作
庸且日想俗の塵と解んが為ありぬ小をけ作皆拙や新撰
戯作者と評すは者も三馬雲馬琴り京洛南小等なり
との余盲昧の戯作といふ程もありて紙屑がぶんの幸い

のらんろー。今廿書。曲亭馬琴のこー。享和壬戌。美西関頭角たし
小道挺ー。張中の事ども。事豆小。中。性小。法ー。東武小。序り
く。後諸書ー。二冊とー。羈旅漫録と題ー。箱小。の。こ
多事と。何某より借需カキヒトく。書字ー。題。志。う。何。こ。の。入。信
張中の凡俗方言と。と。と。ふ。もの。と。通。と。題。と。ん。事。の。と。こ。
こ。が。は。ー。ま。と。と。予。々。馬。琴。西。挺。記。と。何。々。の。題。ー。と。也
蓋。枝。ち。支。根。か。ー。系。の。戯。化。小。眼。根。と。考。う。ん。り。ハ。四。く。の
凡。俗。名。わ。ち。跡。方。言。古。墳。な。ど。の。め。ば。く。ー。久。予。既。不。寛。政。九
丁。己。の。中。ー。珍。世。の。事。の。日。い。や。と。發。字。ー。武。所。合。以。と。事。浦
賀。小。挺。以。其。浦。謙。倉。の。兼。友。と。誘。り。く。の。考。り。止。宿。い。

事三日而も同快の辛りまを飽ほむに於尊。枝ツツと後府
小川く。系。合。に。阿。在。後。事。五。日。又。浮。田。在。陣。何。某。と。も。も。小。道
廿秋葉山小道で。三廿小留揚す。は。多。廿。の。吉。良。氏。吉。田。の
南。海。り。和。と。浮。べ。く。尾。廿。大。中。小。道。挺。ー。常。滑。の。金。枝。細
又ー。又。反。記。ー。多。勢。所。若。松。小。者。存。ー。神。戸。と。も。海。山。へ。出
帝。却。乃。い。浪。を。小。挺。歴。す。る。事。三。十。日。就。中。使。大。守。君。の
石。小。道。い。て。度。く。雅。宴。小。何。と。ー。七。月。毎。の。晴。と。は。て。予。所
と。後。是。ー。大。は。崇。徳。寺。小。と。ど。く。ら。め。ら。ま。る。石。場。の
石。場。り。矢。走。一。城。多。は。の。道。ふ。り。守。山。小。道。挺。ー。と
此。小。岳。光。寺。一。も。あ。て。の。事。日。の。す。一。帰。ま。し。て。考。り。ま。る。倉

寮結夏の時も京大改へやうしる三度此の稿中より
先く同俗方言古跡等予も書留にありしに廿書のく
こく符常乃のびし又たも志らくいさく除るは無余
も及ばしとくも信守のもるんものとか或るし一具
馬次が法がとくしる僻案とく性かす評流法をく曲直し
馬次が西振記と標題しとく此の成序とくもはものなりし

文化十交酉年九月 赤北老補十方庵大伸法也

くま竹のせ海きぬ ぐに初さ先とくあらしもう神小や
誘まらんかこうせの仔細の宮居たりんしとくたにうけ杖よ
笠よと立ふあまつ。もはり此や。不二の宗うあふうかーあま
らとばああこ小孫やよりトて。まも夏かす杖葉の山小らうど
のぼる。あるは人小あははらん。なうしとくの帝小う入志のむも
こはしもう田圃崎やらしとくは夏乃杜若あし心かすしと
月とまきくー山さの尾りの圓小まね孫宿とくく
星まらふらとくのりみやふに志じー杖とやとくあ
あつさ伐か管のほうし流しとく山の夕はくあう初ま
赤まらとくまらとく初とあは人小はとくあう初まら

4000-6 カノニ子服すを

一々は人の扱ひの善小こぼはぶの... 株株は... 後す... 友入... 月廿六

向井殿より百日あり目小... にくは... とも人... もら... やうて... あり... あり... あり...

著作堂曲亭馬琴法

馬琴

享和二年壬戌夏五月九日記江戸出立今夜神奈川宿泊

世にすて系結子送る

同十日大磯泊十一日箱根塔の尻泊 今日雨あつた湯治を

主入向やいづとて塔の尻の湯をす地も人と客との席をいふ酒樓

中村の舟をいづとて小磯泊又船江戸より来たり翌十二日

あつたといひ 十三日 今箱根よりしるべきを暗て 沼津泊

十四日 沼津泊十五日 府中泊 後の人かといつて

川と城をりぬ 掛川泊 川と城をりぬ 又掛川へ入り

あつたといひ 十六日 掛川泊 今日午時をけりて

あつたといひ 十七日 掛川泊 今日午時をけりて

あつたといひ 十八日 掛川泊 今日午時をけりて

あつたといひ 十九日 掛川泊 今日午時をけりて

あつたといひ 二十日 掛川泊 今日午時をけりて

あつたといひ 二十一日 掛川泊 今日午時をけりて

あつたといひ 二十二日 掛川泊 今日午時をけりて

あつたといひ 二十三日 掛川泊 今日午時をけりて

塔より二日 府中 三日 津田 二日 掛川 五日 津田
新庄 一日 石右衛門 水口 三日 石部 一日 市野
おは二日 大坂 十日 伊勢 八日 合 五日 七十五 日

一 延暦中おの目小のげしとておもておれをさきくは
まふりお習古人の異傳墓志とて 伝書凡俗の異形
方云妹は雜劇年中行事の異同名不右跡古人の異
伝とて一説ちびとてとておのふと探りおたる古墳とて志
るてもしりや

石山四明山 別名 石山 四明山 石山 四明山 石山 四明山

一 延暦中おの目小のげしとておもておれをさきくは
二 見朝延三保守とておもておれをさきくは
其日の方角小のりておもておれをさきくは
友人とておれをさきくは
以て根甚しとておれをさきくは

事とていふに

一南都を序の不出次をいふと出水小日ぬからまきり序にあつて
そとく思ふ給あまきとつりの受末かふ申うぐやま掛あま
砂記砂和音浦まゆ時しぬあ須磨赤石等僅のたを隔ふ
し行まきりまきりほめ不出次の序まきりあまきりてあまきり
こらとていふに

一擬歴中人の需不無して他をねえあまきりていふも
あま載ちぬいふりやとせり是るに地りていふに論中
漫■戲の序奇まきりあまきりていふまきりていふまきり
是まきりていふまきりていふまきりていふまきりていふまきり

一昔書と人小えせんぬまきりていふまきりていふまきり
初と初まきりていふまきりていふまきりていふまきり
小志まきりていふまきりていふまきりていふまきり

著作堂羈旅漫録

上巻目録

- 一 大磯の懐古
- 二 雨中の笑山獄
- 三 正雪の墳墓 附十三佛
- 四 今川義元の像
- 五 宇都山
- 六 小坂の中山
- 七 船人の唱歌
- 八 秋葉山

- 九 蕨姑峯の霖雨
- 十 農男 附龍華寺
- 十一 梅倉勲兵衛の舊趾
- 十二 駿府二町街の妓院
- 十三 鳶田の川留
- 十四 お毛人の墓
- 十五 掛川の好事家
- 十六 戸守者の清旭

十七 遠妙記

十九 田の飯盛

廿一 矢も或橋の流

廿三 岡崎の夏定居

廿五 五保の山水

廿七 名古屋の評判

廿九 古画の伝文物

三十一 名古屋の天王祭

三十三 敷小香の毛紙

三十五 摺河洪水の字

十八 吉田の花火

二十 岡崎の土女

廿二 吉田岡崎の夜橋

廿四 名古屋記

廿六 名古屋の風俗

廿八 甚目寺の約稿

三十 名古屋のまき居

三十二 津治の地記

三十四 江戸の大水

三十六 東國の文通

三十七 粟津の義仲寺

三十九 澁山

四十一 園城寺の古蹟

四十三 梶女八千代

四十五 板倉氏の大事

四十七 願城局の巻書

四十九 梶女ゆづり

五十一 灰谷紹益の子孫

五十三 よしゆの墳墓

五十五 祇園のよしゆ

三十八 瀬田の剥蜆

四十 三上山 附百足山

四十二 奴系金

四十四 光慶寺の寛活

四十六 六條の花街の全盛

四十八 烟花城展覧の書画

五十 津原の字

五十二 蟹のゆづり

五十四 京師の妓院

五十六 妓樓の暮用

五十七 嫖客の噂
 五十九 藝子の花合
 六十一 三弦箱
 六十三 妓樓の夜具
 六十五 祇園の大樓の噂
 六十七 妓の文通書は
 六十九 御所
 七十一 園中の裸身
 七十三 四条芝居の太鼓
 七十五 京師の評

五十八 戎ぐの澤
 六十 舞子の評
 六十二 妓の衣服
 六十四 京の女兒風俗
 六十六 祇園の方言
 六十八 祇園の奇曲
 七十 先斗町籠茶
 七十二 物嫁
 七十四 戯場の噂
 七十六 京師の好悪

七十七 男女髪の内俗
 七十九 旅の盃蘭盆合
 八十一 清水のちりいと
 八十三 町家のおぢ様式
 八十五 了りたるを
 八十七 京師の七夕祭
 八十九 京他の酒場
 九十一 祇園夏座敷
 九十三 河原の油涼
 九十五 浴外の古跡

七十八 大茶祭の草紙
 八十 六道の植賣
 八十二 京の盆ほほり
 八十四 内裏の御枕
 八十六 せんす一万衆
 八十八 地味はほり
 九十 名々々料理店
 九十二 大佛餅
 九十四 京師人の多儉
 九十六 京師のうぐも

九十七 一ノ

九十九 け谷越

百一 金剛寺

百三 盛装の迷懐

九十八 河鹿

百 妙心寺の松

百二 大佛殿の浄

こ上

上卷百三活法之

壬戌西鞆旅漫録上卷

江戸 戯作者曲亭馬琴法

五月十日大磯の駅小振泊し、まの不用ありて、僕とハ

川を序し、今般京侍も、小を神奈川にて別れ、河に渡り

張小別、此中不登、寂寥多あり、此駅中の略、三は、昔の

地、不、虎、名、も、又、く、人の、志、を、本、の、也、と、云、ふ、に

祐成全盛大磯傳、千里高名虎師前、一夜風流おとこ乾

乳鳥、唯今有出女如鳥

同十二日のあ、願姑峯と、こ、今般、雨、あり、ち、ま、

箱根八里上流汗、騎馬越、未行路安、却懼、昨今、阜

日而明朝大井水漫

三 十日の夜よりあつて三ヶ宿は原吉原岩淵薩埵山互行の
中一日も争士と云ひ又府中の駄小返多中も不二堂と
雲より小寺あり

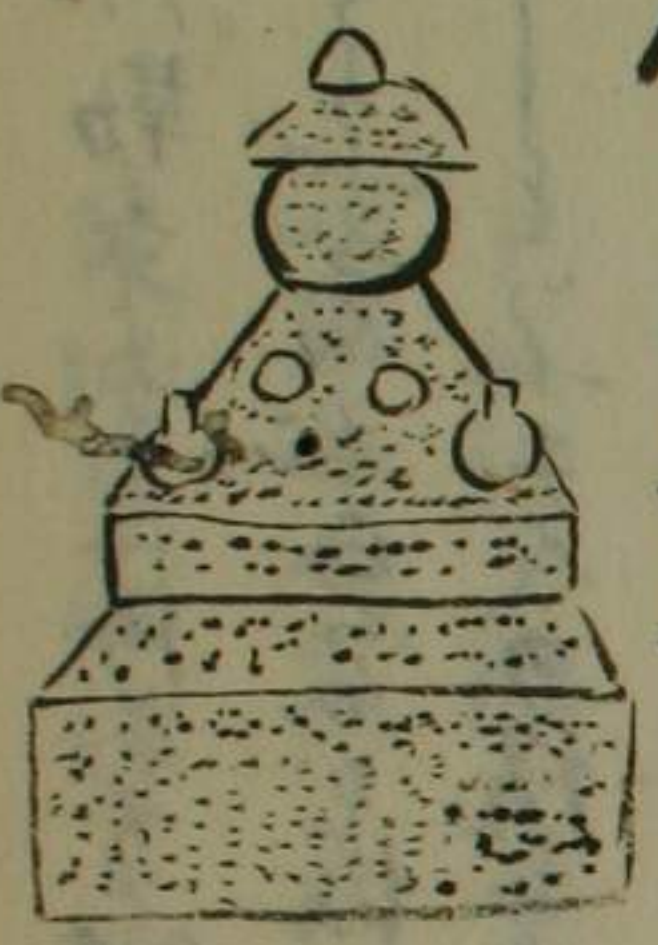
らきり句あり山小不二寺あり馬路

四 後府の人々は留士小田の比多ん高の清浄寺を
所宝永山の方凹あり人の形のみく高純清浄寺あり
山まを農男と稱ひ世々多る年もあり又又つる年も
あり田子の土人の白農男ある年々必しも穀能熟す
と云

田子の田植より多る吸下の農夫と云

凡不二堂の眺を小天下と稱す地を清所有部の郡
上地村あり清浄寺の堂より留士と云小入りの氣を
おと最上池端といふ一又奥津の双橋人も地系とも
いども連るありききとけりす一と美答者ともなるよと
根こすくけうい

五 後府宇所喜提寺小中井の墓あり



秋ちうのむし七物も中へ入るとんち
高廿二尺五寸年月は城首の元記さん
むら建てあり寺を小向うと云

又弥勒寺府中より西三佛あり凡山拾下平今々地名ふありて弥勒の十三
仏とよふ爰にらるるが故せの爲にとも其神志のぶの二女が
建（ナリ）一とよ土人の後あり又らるる墓もなりり守常の石碑
のゆ

六 梅の島（シ）がふと海府を望む所小側中（シ）行小醫（シ）ありも名
々を思たり此家との跡ありといふ右側

大津評して日まあり卯年海府内城代大久保玄蕃以
番以山口海府内城番を丹戸村を奉り町奉行の故令
小年迄神保三帝存り卯卯年駿府内城内山系記
の内乃文通小曰

此の地を味算やど清小三平いしともあよけ

捕りいこ上

一 争ひはゆふに中比に名聞けりし（シ）駿府海を
町太らちりる者し所宿と借りて名はひふと後令不
年迄同心えおり川は田あり是時大久保玄蕃以
丹戸村をりる人より心けりし（シ）故丑の川をりる
且上小年迄いひるま生つて（シ）故小年迄いひるま生つて
丹戸村をりる者し所宿と借りて名はひふと後令不
年迄同心えおり川は田あり是時大久保玄蕃以
丹戸村をりる人より心けりし（シ）故丑の川をりる
且上小年迄いひるま生つて（シ）故小年迄いひるま生つて

中より書きたり候事あるはなも地なり
の捕り申す候事候事候事候事候事候事
鑿仕あり申す候事候事候事候事候事

約あり申す候事

神保三ノ年

辰巳申す候事

井ノ新たら

山口候事

大久保三ノ年

松平信長手紙

七月廿六日

卯し申す

松平信長手紙

卯し申す

うせあるは申す候事候事候事候事候事

七

豫阿ら那郡大岩村綾核山の向小今川義之の

画像あり用の表とき東常小しと常と持りむけ十九と義之の

毛目ある諸人小ねうい毎年訂のまくと廿日交り

八

豫府の政は二丁町と呼おひ女名を阿波川町あり昔

神君御在城の御足許の姫女町ありあるは廓中今も

大小表えたり又世と候事申す候事候事候事

障子が建てあり依り標客ののつ喧扉と一ヶ替りて
放小内へ入籠の方より入をさるるた小女三子離の方と
に向か着けしこまをよこ標上マカシもせはく又むさくら—
けあぢ又なまおと称すはものい戸より原の西にけあぢ
若きりヒ—客を人けれとこの友をりりてもけあぢ
入くりい海の小舟をよけしとほぬぐ—し九つの障と
張り世人くはぬありとつけ小ぢをりり又はのさほく
何まかん—おまかん—おどりお河つつ人多くを路の京
海りとほく—とまを地倒す事多—又はの河小あこと
いどん—しよはとふ—山んやまは二年のつあぢとふ

のつあぢ書しとあよこ或は何さんちうくらあぢ
よちあぢて今かいうぢくとふいん行べ—しよあ
酒器硯蓋など甚むさくら—藝もあまどを又お都小
—して似て非なるものや幸タイコモチ以ハ廊中の糸を酒をの着いもの
又々廊のつ番などの孩児た小酒も細代むすこの門忠むすこのあぢの
るありや者けぬふはまこの海あまをきい小封間タイコモチと—し
酒食と食ひ小甚い浅ともとむものよ買ととり封間タイコモチ
とちの
云語形容胡蘆するに甚たり甚下早てた—くいやあぢの
しせの—の細えにち安永九年の去ら—のや酒樂とつよ者
は—のしよとほりけちの、ちけふぢまのちぬ一極し

一軒とひて推乃海まり

九

宇都宮の十國子豆粒などのあまよと麻糸と以て十ヲは
はぬ或五連と一けとせり土人の足小北峠下山地ありま
とる小北やわらけの夢想しりて十國子と製し小児小服
さしゐるに万病平愈せりとふも國子の秋ち好湯小擬する
小やとの製も又古し

猿さる鳴なまのこ色いろがつありとう津の山やま取と目めの合無くりる終り

十

連日のぬ小大井川生来からまが岡故より清田のろろ渚大小石
こらくくを振えり予々此の夕清田のぬ小入るに予が
あまの因幡をてふあもあ辰の御傳とありぬ小あ孫宿小ら

十一

社やしろとある者あまがりのぶと一因幡公の向ひわが一原とくつる
商人のあ小遠まをり時くの飲食ハ因幡をり持来りて餐座一
ぬ小取中の惣旨小人の小唄などあましくい戸小在るがぬ
川を十五がかせる小あまがりとう津の山やま取と目めの合無くりる終り

味あじがい小清田の取ふとあまてか二申表の座取で憂馬琴

十二

小取の中山乃取泣るハ日坂の取より十七ハ丁じり東り山の生還小
りり子コソノ月ツキ鏡カガミ音ネハ小取の峠下久赤守小り淡アハ蔵クラ河カ波ハの神社ヤ元
百山鏡寺守小ありとせむ天る山へ街道よりを里ま小のち山中へ
掛川の沢とつと右のろかえちまよりえむと見るし

新坂ニイサカ蔵クラ糲シ児コ音ネ館カン由ユ来キ作サ世セ夜ヨ啼ナ碑ヒ鯨カミ音ネ断ツ絶ツ元

間事。大士方便無大差。

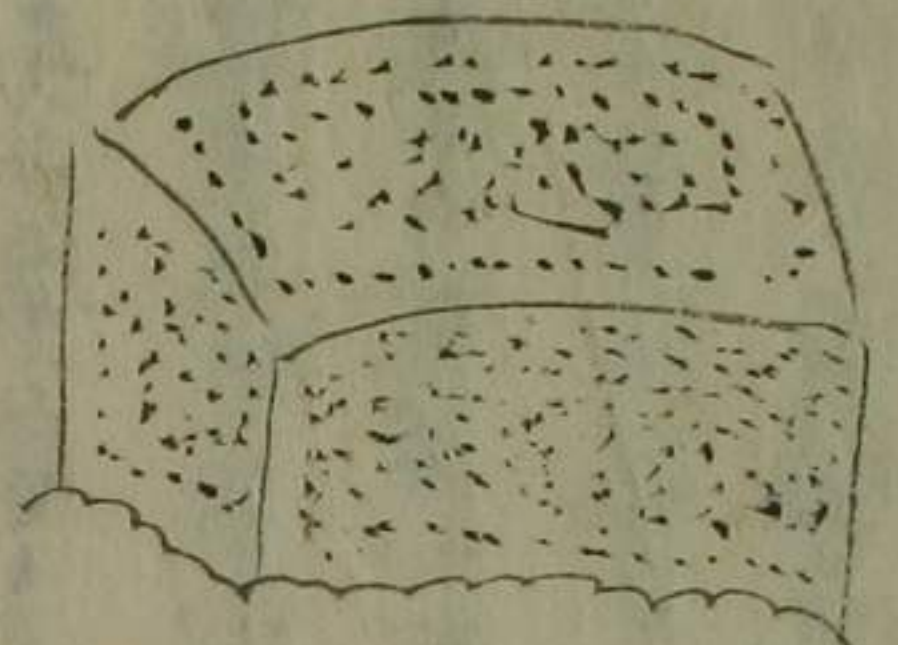
十二

掛川の駅。轉子寺とありありや。昔の音西のり小紅毛人の墓

あり四方小石の玉垣として施主大通辞の姓名あり墓誌

阿蘭地文字に五六年以前紅毛人旅中安小以凡

箒笠雨降
へまふコアラ
ハニアリ



取らぬのぬし。さめはこり幅五尺小山人に
おすもあさん。四方と名をいふ玉垣を造りし
小まると。紅毛の文字。池より掘り越す。ま
いと。まは氏小ま。ゆり。ま。

十三

掛川にて又々

船人の唄
寛政三年正月十日大清寧波府船人劉然とホソノ徒ハナ
六人遠州神志が浦に漂着。又彼地。遠多ウチ。情人ホカ。多。曲子。

我的吓感即的呀。有呀吓。有看。吓送奴个九

連環九吓九連環。雙手今未解。不開奴把刀兒割。

不断了呀。有。我的ハ。助字し。吓ハ。感ハ。人。志。人。と

器をと。めん。人。と。して。又。と。して。居。ま。る。男。の。智。恵。の。物。と。い。て。又。よ。し。と。し。て

送。り。こ。ま。と。持。得。く。と。い。く。又。送。り。こ。ま。中。の。心。を。小。刀。を。以。て。切。り。ん。と。し。て

す。ま。ま。切。ち。を。ま。ね。と。り。よ。い。く。中。の。心。を。切。ち。を。ま。ね。と。り。九。連。環。を

誰。人。吓。解。奴。的。九。連。環。九。吓。九。連。環。奴。就。と。他。做。夫。妻。他。們

是个男。子。僕。了。呀。有。前。章。の。二。人。を。送。り。こ。ま。若。し。く。人。は

あ。解。ぬ。ぬ。と。存。く。こ。の。男。と。す。て。外。の。男。と。夫。呼。ぶ。あ。い。つ。つ。あ。て。誰。が。い。て

哥。く。吓。住。城。的。妹。住。船。妹。吓。住。船。雖。然。子。你。隔。不。遠。開

了。城。門。難。く。得。見。了。呀。有。哥。と。ハ。凡。と。い。ふ。小。舟。一。つ。あ。て。は

男。小。男。と。い。う。て。不。し。味。の。事。と

小川一君の母中かありあは中か住のよの遠くはといへも母つ
 陽あまの思半のこをと持しむあり水濱淨君の思もふり
 變く可多的飛上天を吓天吓上天其嘯吼嚕滾了未還有
 一個重く相含了呀有く前章の二かかつとあ越ものトマモト
 遊車との多は鳥ト夫一更吓還有有一個鼓記的吓
 有呀有呀有二更等你的不來了不吓不來了三更鼓兒敲
 半夜四更金雞鼓金雞鼓曉呀有く今宵五ッ小あふ一
 して含る中かやふのを鼓が鳴夜きくわううりてもあふ九ッ
 ハッまかりてもあふいこり路の啼也行りけふありしとふし
 五更吓三點的天明亮天吓天明亮紅羅帳象牙床錦綉被
 鴛枕這想思害得奴家想免得奴家思想病了呀
 右ハッ打も男の妻いももやセッ五ッ車もとてせんよやく
 床のうちに衣者と見花とをうて寐てえも所かきん我

才の思ふも男小思ひとくは女思ひあはるほいもの新中といへも
 小唄ふ管絃よりしは僕人情さうに異あうさか
 伴の徳由寛政十二年十二月十二日大清寧は府の江人劉然し
 等殿案十六人遠江灘袖志浦小深者い三里廿所太田西尾
 屯房の三家の不領はまきり記しる所の哩曲江人平日嘯不
 正のものときりしてふとを拍ひとを掛川の人か供あふいひく唄
 いゆちぬ甚具あり

十四 掛川下復町の太場氏 通称大脚 号松風亭 遠か中一の事あふ山刺名
 ぶの書画と評あふふ好張又く客小待えあふの書画申
 小堂上りのあ合書四字和奇者流のあ合書儒者詩人和人
 書家画工のあ合書等より何れも名あのこと集りたり人の

平野跡を求む。僅の扇面、大木、數十人の、今書など志しと
しふるるる。■ ぶきや、は、類。世人の、今、中、を、京、陵、と、い、ふ、
書、と、せ、人、と、京、の、戸、大、以、作、勢、(お)て、書、画、を、求、む、一、回、の、途、
に、は、は、は、平、小、み、う、と、を、い、ふ、を、三、年、小、一、て、い、ま、が、そ、う、に、い、
り、つ、田、舎、小、う、つ、一、一、人、お、し、

十五 秋葉山の掛川より麓迄九里あり、四十町一里、山中又七拾町あ
り、平野の跡を、^{つと}取、り、ま、道、あり、一、が、山、越、小、一、こ、も、近、か、
一、平、地、あり、と、つ、一、と、川、多、一、と、一、八、町、と、一、平、一、と、
く、一、と、く、は、ま、に、山、拾、七、町、あり、雨、の、後、を、平、地、お、も、
と、一、小、見、る、を、格、次、一、お、小、川、を、お、し、一、く、歩、く、と、一、り、小、し、又

世の中、^い食、地、之、一、い、思、お、の、橋、店、今、々、大、小、甚、へ、一、麓、小、お、
橋、店、あり、一、の、一、見、奇、麗、小、く、山、中、お、し、の、一、橋、店、あ、る、事、よ
と、目、と、お、鳥、の、中、一、又、秋、葉、山、中、一、町、く、小、さ、一、の、塚、あり、枝、の、木
立、高、君、の、造、り、の、戸、と、子、の、社、お、小、似、を、お、あり、又、法、所、より、尾、の、
と、一、一、の、十、字、街、或、を、街、道、と、を、書、く、秋、葉、の、常、お、竹、あり、一、社、
別、一、一、也、幸、原、島、あり、驛、遠、三、尾、子、の、女、の、女、々、は、お、と、風、
事、も、一、一、法、を、お、り、ゆ、々、隊、分、ぬ、も、の、と、一、一、又、縁、遠、ま、と、一、女、
一、二、年、と、一、下、十、五、二、年、の、女、八、人、九、人、と、ま、ま、と、拾、人、の、内、小、男、を、一、人、
幸、頭、一、一、を、治、する、者、又、か、一、一、

いろはにほと、^いら、あ、い、や、假、名、の、取、り、一、一、
鳥、琴、う、

其かゝるまのはた多もとて山火を蟬のまごせ初シメす 馬終
十六 遠所より二所のる人家の戸守にまきく清セウキ燧キうくくりに山伏果
と名とまゝあるもあり

十七 遠所より西へはえ抜くある程多く自害の垢カ他くかり又十五
年と紙一若流あり中小に拾九本山拾五山にびくして前
坂と並大前流若干あり入りづまをゆくは喰らうべきと
くは流をどすのまをさくくする後より後所のら皆志
を化中遠所三所の人まがま又ものいらは仕直すチマと
けりゆ又二身とふづーモウーはチマチマさくかけチマチマケエツン
小のむまのれにケエツンとますはなくとらふるむむ

の中にもまきくを都の方を小を腸チウをわゆるまゝ

十八 三所吉田名の天王念ふ毎年六月十五日入る板乃花火を流す
天下中一と稱する大筒と稱するもの山筒ツツの周圍ニハカリ
板乃尺イタナシ多く樽ツツと似てしとと居んものみ流すの花火あり大筒
の資料は例年
ゆゑをうとせう
とつ 樽と稱するもの
又板乃尺なるもの山山ちをり流す所のうを小を板の木と使使囉ラ子神
樂ガクりぬ花火をりぬ市中小てする中中に板乃尺イタナシ板イタ或カをカ響ヒの
子の下小花火に似て散うても大難の災害をカとカ合カく氏
神のの獲ウ小カくカいカ付カをカ年カ天カ空カのカ社カ神カのカ八カ幡カもカに
吉田の海内小あり六月十五日と天王念ふとカのカおカ板カナカり

中河上は馬町のあけしむ火とよるふしをサ拾三万幅三万ふ
 とと立おとふをそくく大花火あり火の接しぬれ大谷と
 度小いよせ小火と接す時いらの火を上小群りくがるんおの
 人くは徳延とわあきりそのぬ町くのも火をわらり終る
 流星のしりくふも大駱ろる半日中才一と笑すまもの
 とし

十九 当敷吉田の飯甚女是は越後藩小田一治の赤番とよまに
 圓扇を侍ておひの吉田あゆ中も小娘は巻く仔細あり
 身まものしあはむむうの仔細し飯席上おて三行と
 多しに執着淡きかしらうがうがどかおれりふもきりんと

いのる若といひ他倒するん堪をう然まども土地のあまの好ま
 じやまが遊して居るやと評判するしとすて今切の海
 と越て西の人おそぬらもいん小死ん京小死ん中玉の同家女う
 小けてえさべー入土地の婦人ふーも文多のい高家の街妻かど
 をえるに谷をよく髪にはやく赤ーの足は仙人は小
 止ー尻大まくいふも又奇す折し

一 田島あまのぬの髪くのぶし
 是は伊豆見し土地をぞらぬ女はこれ小
 つらきり伊豆人のあまのしり
 大ういふまははは



船山を海へはるりしとあり
 けしきもあつしそとあり
 のゆきしよて仔細もとあり
 かく出されしもなかりあり
 まん丸小中し



伊賀の海田番を敵に戸小と一京とありしはもあはれ
 一伊賀の番の中ゆと多くあり京ははげしきなり

十五右古田五ヶふもれし飾山とありしに古田ありおし古田某の
 重頼朝小扮して金の立えはし長太刀を佩し馬上に頼朝の
 乳母といふものあり偏帽子排の袴を穿し上りて古田某は
 又士人の殿原とも柳の素袍小け烏帽子を穿し古田某は
 内を走りあり中に重忠と名ふるものあり世に古田某は中

上と被るもの山人はらう殿に感入りしと世の中ひけり
 又從下彼を忠ハ騎射並傳の陣羽織脊中に幣をけし一領の
 様友のちにもり馬馬上りてはとを袋のしんちと扱ふにたあり
 こと古田某といふ又世躍りしりあり大太鼓も人小太鼓も人同し衣
 裳に也く笠といふもささる西綿の陣羽織小小柳ありしや
 の人ハ偏笠申しとをそし世ハ枕枕とけしは多小唄ハ古田某あり
 糸はあり

二十 岡波の城を遣と保るものありしに連年ゆきまきて遣と保る
 是は杯も入袖ありりありしにとも今を汗まきしはの風俗ハ
 古田小某も一城の板りするに其をたき浴衣あり布子ありと

しとりてありくし是本宿布と云々（このまのハヤ馬リカウーオチチヤチヤ）若くはあふりのあし
 但し（ヨ）増産の指鑑小集の時より晴て宿布と云云して夜は人
 土地のさあつて小天王何やらけりては（まのまの田し祭り多唱小ナカトウ）まの日本一のあし神
 ありありと増え坂名小くの屯と云々いなりことりて

二十一 矢矯橋長サ二八間ニヤル武川ハ矢矯の里乃東小ありぬ原ハ
 本名山の溪間より流れて来て（ス）武鷹塚川といふ西尾小ありて
 ニ流れ小入し夫し武川男川とよ川の廿三丈ありてといひて國を
 大津田やと武川一由川大志川の廿三丈ありてといひて

と定めてしつとせば一川の名は物号稱あり

二十二 古田名流は市々とは流る女と借りにき（巻）ててえをさ
 し客ある女も必ある女二軒にそ人とゆるさる一軒に少人ある
 も何しと人抱さゆけはし好る武鷹塚を好あるまより月こ
 資料と送るしふれ小大橋小な少人とを（左）古田名流一駅の
 女に餘人あり計駅の女の之業小今■板をひ合がらういといふを
 何もしつとらふといふ古田名流と西尾勢女博を回し京
 流に流る小して（注）人あり中をぬといひ大田計所にて流
 らんちあげてし流るまのといふ流る下ふやのハヤといふ
 めし流るのまがくく板をとりて評判して定めて價るといふ

二十三

あまの地系と云ふてあまの世居と云ふりヨシガ薩黄はこして二階
様ある中山事ゆもあ中世居のは者共し土地の規定として
九人のあは行ふん客あるはも者と同席して入ぬ事
あはしむ物之各代題上を木のト杉らう後合戦と云ふ切也
ありしなを建とし下りるるふお会拍子ぬすのゆのこ
多く地倒すさし

二十四

三所ニイガサ新固作事より西 深んぬきあとして木海問をの家ああ
てよ長尺大節々ね名と相倉三突といり世家の納戸の根ユシ類戸の
ぬー穴小白紙をそえいあまのりあに押あてまは十ら斗先の泉
水草本人あを獣巻く紙中小振りしてその鮮明あふるる画く

二十五

かみーおやん七也にうけり天也と天也にぬるむ何事も皆逆うめふけ
さや 予がえー時池小杜若あり竹あり柳あり庭小児のこ習ぬ紙
わいてありし表紙の文字年月近あざやふ清をり又雲の遊く
小アキクイ髪髪黠ー又須臾に散ー竹柳の風小紙にぬるのサキ連サキのサキ々々を
ま語りりの景也押紙の機カラシ関カラシあり主人はあはらるる人に庭
小児とせーんやううに眼鼻衣服の押紙近付ははりその穴
僅ま○ せしりりの戸のうー穴らるるは紙一枚の中へ方サハ
九呂の山水印細くはるるを園画の硝子やミとあまの小似を
勿海戸と建つて内々を暗くしてぬるるを新と云ふ又原
大宮通る伊能丹羽又な信のゆのうー穴小白紙をけり

私曰 納戸ノコシ穴ニアズ表入の 大戸ノ 紙ヲナシ穴

うがやと東京の路あるにけりしも逢ふはふは
 又佐治の海防業所堂のこの羽目の多々も塔の乳務
 とし事業てすしむ目あたえび京とこの事々予推
 歴の折柄はあそりえりあに口ごの自然とさうりむる
 ものなるべし日中々務るゆむ鮮明し世多ふりるゆある
 へ事としむるその方にやー完なく又八人の業にむぬやを
 小て人の業もゆえし又國陽雜処もささ小ゆする事ゆ事
 か進はまもむむしりりりる事とえしをり

二五

尾物とち歴の人にするふとせんとす
 せんはいろせろのれいこ又人とすに
 せんはつせん

まうそく ヨイにてやまどしういんとは地りさ
 どりふそアアどのこち又なはし
 きんおやじん 補いん

人の家帰小同謡する地邦小もあはし
 人の家帰小同謡する地邦小もあはし
 人の家帰小同謡する地邦小もあはし

人の家帰小同謡する地邦小もあはし
 人の家帰小同謡する地邦小もあはし
 人の家帰小同謡する地邦小もあはし

人の家帰小同謡する地邦小もあはし
 人の家帰小同謡する地邦小もあはし
 人の家帰小同謡する地邦小もあはし

二六

君ち屋の男女の凡俗もつしち坂とをぶし
 おがはばの
 のゆい凡

おがはばの
 のゆい凡

おがはばの
 のゆい凡

おがはばの
 のゆい凡

江戸小町又悟リシヨウと云ふ京と云ふ江戸の歌作也又も名古を
近きより云ふと云ふ人々をヒトすし誰と云ふも京の人
一向をぢれ又名古の女子ハ靑色の衣も腰々大小あり一人也
して細腰ありと云ふは風土よるや男子も夏々偏笠とあり
てありハカ日傘と云ふもあり但一名古は藩中の女子のこころ
江戸の風俗小まあるや云ふ

二十七 名古は魚内小富なる所也魚イサ町七ツ宇ぶと酒橋あり蒲焼を
飾するもの一持あり江戸上京の料理とすも蒲焼の風味ハ京
江戸小町者より取蓋小も蒲焼と盛へ凡戲場のみも三法停止し
見せものおもち敷のこへ凡酒橋客二階小ある時を男子出で酌とせ

女子ハ二階へ下り小持ありイサのまへへ入りておべへ又名古を計

四イサ飾するもの之所ありの街あり田下と云ふも今ハ稀く是れは
水口ハ伊豆と云ふ所あり岡山安人など云家より和衣の襦衣裳ハ幕
や敷太鼓々春田ハ浮世法々約軒屋陰々月津ツキおがくハ後イサ
造り花々次田ハ書肆々凡月堂永永を借ハ胡月堂草子々
室を結々ハ草子々イサの傍々村川カキ川カキ田イサ丸
俳諧々士朗士の吟イサもあるべし又春の日松山の地々竹門跡の樹々
若宮ハ幡丈洲七ツ守執イサ田極の天津ハ廿天津の別尚とイサ岳天地と
不祥ありぬ所の古もとあはれり凡磯舎と云ふ風流の遊舎も
爰して具あり又夏の日仙原の地々廣小池兼山と云ふ柳の葉師

の別当と云はれり不尾研舎の美昂之寄石とありて多くあり
 柳下亭と号し世傳うりの元舟見流の人し叔柳の葉少ハ取十町の計
 茶をえと地是者不ありて正法を柳の葉少とて廣小治の京
 色し戸あふ葉研唯不警覺をり凡柳涼の地と記電治り
 と計治遠しぬふれさよあ〜びと計廣小治の地ふぬふり
 二子公尾研見目守小右ちをより二重ぬし法をぞもくいし西合寺の鐘
玉目寺ノ本堂に設世音唯右天皇御在四年十時見目前燈ト又細ヒテ西合寺ノ上ニ有ルヨリ是日
 あり守常村降るま小計ゆの法小曰キト早大比呂し原に三入一あり
 紅雲寺千九余年ノ鐘いし西合寺鐘
 晨■鐘響遠振十方界
 夕梵聲廣度三有際

三寶久住四生俱利
 天下泰平海内安全

建武二年三月廿二日
 大工藤原心安
 大檀那道譽
 住持比丘冷海

外小文ありて下より入る〜いぬ〜木入道道譽々々といふ
 之〜情々々平記がえし〜西合寺旧跡イニタ不カトイハレ〜
井山門ノ寺四福セシ時カ或ハ佛并威亡ノ時ナトニコトテ〜
 乱妨セしもの〜テモテモテモテモテ〜
 田子ゆ〜まぬ波見目守小尾研海生郡以上の所〜
 山と号〜

二十九 名古堂として入りし冷き物

一 さいめねむしは冷き物一巻 山崎良民の著

句集の内序の作し不雀の理一と云と注さのちひし

此のふしは戯作多し一しつもの附の由序のやうに

一 福省のくしは冷き物一巻 同下 冷き物一巻

京より一日一羽の子と云を撰む氏もあつても

くしと云もの成り福省も若のふしにたりと云を撰む

一 花を同月の冷き物一巻 同下 柳下亭の著

一 天狗の内裏冷き物

是と云もの成り名古堂のふしにありしは世の流るるなり

次の日同様に書たりと云名古堂の人もなかりあり

三十 一回性即後日 義太夫中道に化大子後入

山崎良民の著しきものなり是も中道と云ふ事なり

いふ事と云ふ事なり

三十一 名古堂の芝居の博所と大洲ありと云く中道して又と年免さる

竹田のくくり名付くは若く九人の歌と云ふ事なり

名古堂中山一徳松平三市中山文五市市川高し

居のくすりし各一劇のむらりし印はに名三市が無間の冷き

判じよ一市と云は名古堂のくすりしは自よと云は名古堂のくすりし

名古堂のくすりしは名古堂のくすりしは名古堂のくすりし

丹りやうニ階儀あり一又丹菊の胎核より選ぶ事と傳ふ所なる食
物と七寸位のものを入ておぼくは好む事ある人の物のあるを相と
積上げてふふに焼く一又茶菓のあじあつものを皆捨て茶菓のきこ
茶りし人の菓より人々をいふまでして名を公に傳治定と語を
野郎くはゆめをわくは陰看極か一極は後者の名と書けるこ
懺の云々名を人の所人むき後者ありてありとやうに極也
の本所に書してと一果又の文字とつづき書かへる出本公の
ありしあり

三十一

名を公天子の車樂の車山較と似合せて上に山と落す許か
一車も大なる地車大八分をありて牛とつづき大なる地車

は等て扱入るごとく車樂の調子、端塗小して合ぬ又立風が
は方に押し蹴成と天勢威小合京の過きの一あり切とトケて
こ奇麗し上にいりうくの人の歌を立しとの人歌拍子に合せてうめく
の後関あり富太鼓でこら中人よりして拍りとの拍子、祇堂を
や一し警固に麻上下又持拍威に狂舞々京のうは一し伯樂天
上は王布袋の躍りあり寿老人の布袋の車、樂のつ子の人の歌
おに立事とれてふまよと書くころりしてあるはあつものあり凡
車樂セリいりもあま一十もの歌は樂十もの末の歌をり
中、いり暮る降るし車樂を地所、お十代とけしうねを中あり
は月十七の東照宮のあり、名を公、川河の向ひと書く者、おのま
ありとの件、處をいり

各槽出デーンを居り前々又活字ニキキス

時以て一圖の如く五艘次より一々居先漕ぎ了船一紙を

難より一紙艘一紙艘三紙の計七紙の如く條々を以て詔の上へ山の

つらづら又別紙十法月の旨長紙竹俵小づりけし中興小

づら紙の如く居先漕ぎ了船一紙の計七紙の如く條々を以て詔の上へ山の

活の人扱美各群集ししをとる居先漕ぎ了船一紙の計七紙の如く條々を以て詔の上へ山の

居先漕ぎ了船一紙の計七紙の如く條々を以て詔の上へ山の

欄干の傍の陣羽織といはれはかくひ多敷の上の如く居先漕ぎ了船一紙の計七紙の如く條々を以て詔の上へ山の

より一山車又同一世傳羽織大團扇若く紙中管弦ありし紙

を居先漕ぎ了船一紙の計七紙の如く條々を以て詔の上へ山の

揚りて紙の活字又別紙十法月の旨長紙竹俵小づりけし中興小

活字の如く居先漕ぎ了船一紙の計七紙の如く條々を以て詔の上へ山の

活字の如く居先漕ぎ了船一紙の計七紙の如く條々を以て詔の上へ山の

活字の如く居先漕ぎ了船一紙の計七紙の如く條々を以て詔の上へ山の

活字の如く居先漕ぎ了船一紙の計七紙の如く條々を以て詔の上へ山の

活字の如く居先漕ぎ了船一紙の計七紙の如く條々を以て詔の上へ山の

活字の如く居先漕ぎ了船一紙の計七紙の如く條々を以て詔の上へ山の

活字の如く居先漕ぎ了船一紙の計七紙の如く條々を以て詔の上へ山の

活字の如く居先漕ぎ了船一紙の計七紙の如く條々を以て詔の上へ山の

活字の如く居先漕ぎ了船一紙の計七紙の如く條々を以て詔の上へ山の

活字の如く居先漕ぎ了船一紙の計七紙の如く條々を以て詔の上へ山の

活字の如く居先漕ぎ了船一紙の計七紙の如く條々を以て詔の上へ山の

活字の如く居先漕ぎ了船一紙の計七紙の如く條々を以て詔の上へ山の

活字の如く居先漕ぎ了船一紙の計七紙の如く條々を以て詔の上へ山の

活字の如く居先漕ぎ了船一紙の計七紙の如く條々を以て詔の上へ山の

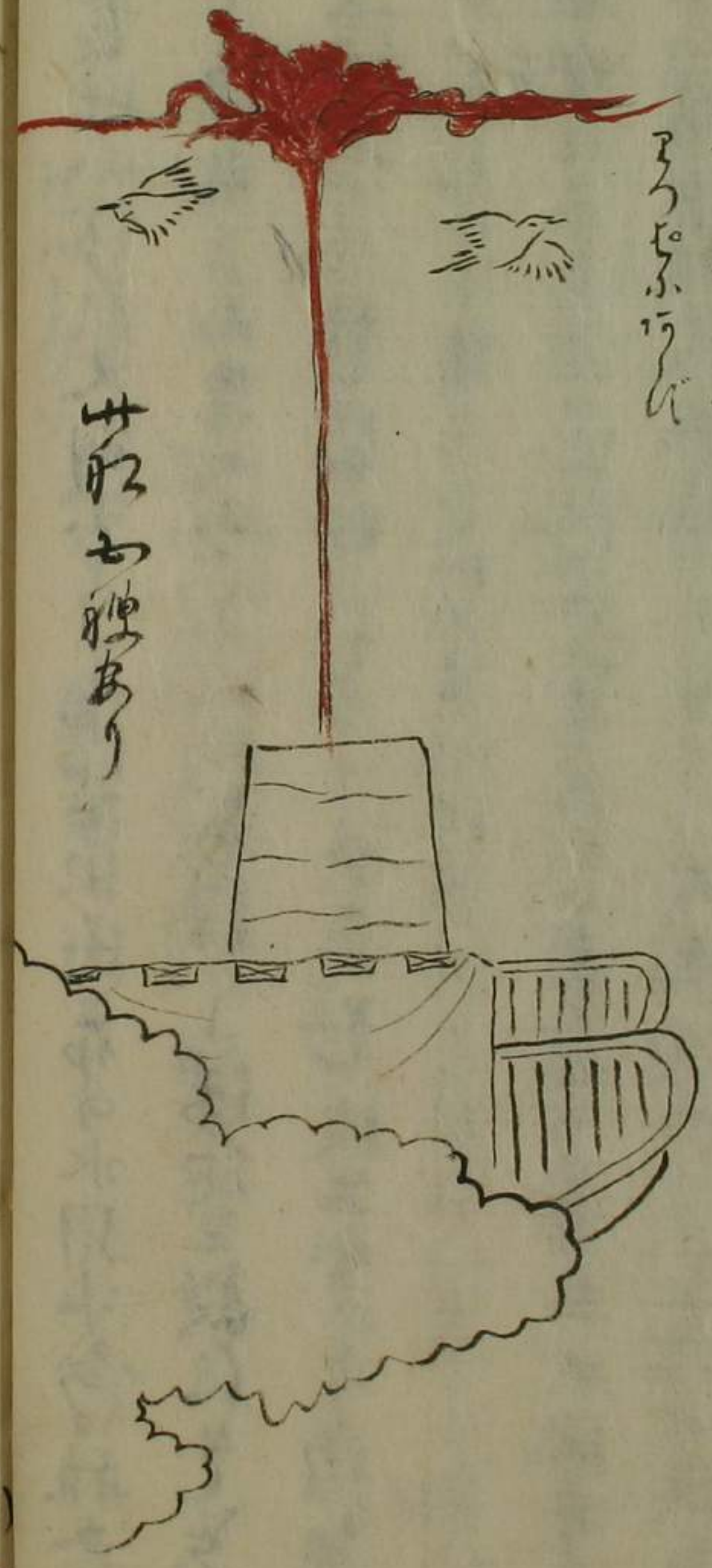
活字の如く居先漕ぎ了船一紙の計七紙の如く條々を以て詔の上へ山の

活字の如く居先漕ぎ了船一紙の計七紙の如く條々を以て詔の上へ山の

活字の如く居先漕ぎ了船一紙の計七紙の如く條々を以て詔の上へ山の

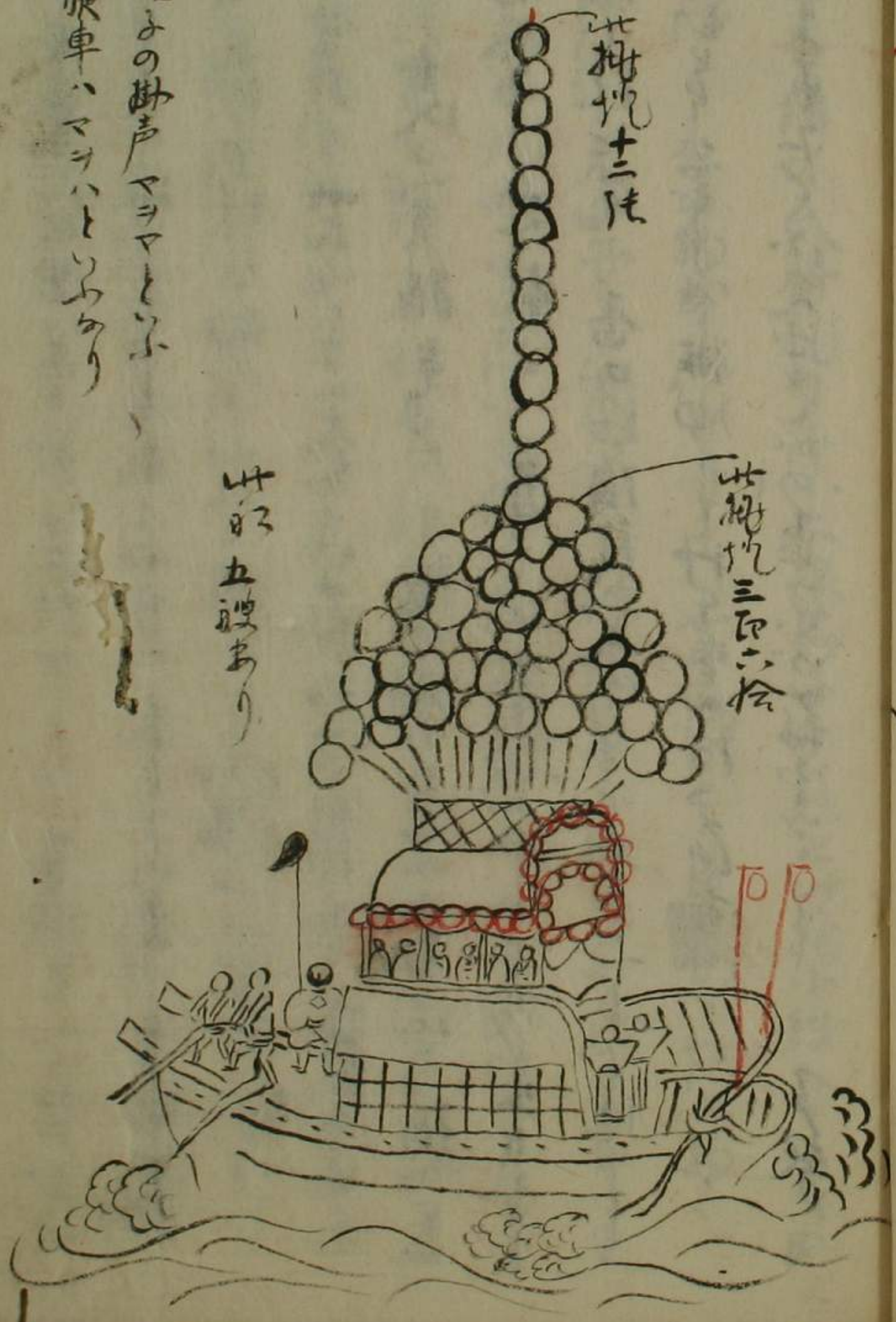
へありきとて瑞雲も余人と侮ドえん様
 羨ましくも又も一多り名を
 の人もかゝる事稀ありとてしやに
 会ぬ予性^牛は^三惟^三階^三歲^三時^三記^三ヲ^三エ^三ラ^三シ
 コロハイニダヨノ祭ヲ又ズニソノ又
 相^三異^三ヲ^三ヨリ^三ト^三ビ^三コ^三ニ^三記^三ス

此社を新あり
 かしき布のありて
 又うたふらひ



此社を新あり

此難よの掛声マヤトと
 市脈車ハマヲハとらかり



此掛焼十三法

此掛焼三百六拾

此五禮あり

ふせり正在ニ雲^ニハ 予々世時若古にありき世七のね本名

■[■] 江戸市迄船行つ時比まじぬ海ありし一あまじ言の訳を山崎
がー内りぬ言とて海小夏をふりし一登とまふすと浮[■]

■[■] 古田若津小を似ひ行事も醜婦[■]名ちかの人止まをシカメと
渾名^{フダナ}の姓柄もありし旅人々との諸病つしりし一ハセのふ言

より宗叔の世々石系少少ゆぬゆれし大ぬみかめりぬゆ
ぬ世ぬま[■]一太同ぬ井九のね横田川也 ^水ニヤ[■]新いせりし一と

か海一し候一か事也がそをぬくもまは又か白[■]行[■]人[■]余の
諸人々横田川の川場いばこ[■]云[■]小の立柄茶かつゆ[■]みよあま

予々人足のお合ありし[■]世々ゆ[■]び[■]た[■]たま[■]ぬ[■]大[■]水[■]水[■]は[■]宿

田河[■]く[■]床[■]の[■]こ[■]い[■]五[■]人[■]水[■]は[■]大[■]奴[■]の[■]う[■]よ[■]田[■]畑[■]一[■]面[■]小[■]あ[■]押[■]斗[■]り[■]る[■]

中[■]五[■]人[■]騎[■]死[■]し[■] 予々奴の中ね冷麻公とり小籠屋小あり此[■]わ[■]こ[■]る[■]

少[■]て[■]お[■]難[■]し[■]一[■]か[■]の[■]い[■]ば[■]と[■]士[■]打[■]麻[■]と[■]り[■]若[■]今[■]の[■]い[■]づ[■]こ[■]の[■]立[■]柄[■]茶[■]

一[■]ゆ[■]り[■]を[■]い[■]し[■]一[■]中[■]の[■]鬼[■]と[■]あ[■]ま[■]と[■]運[■]送[■]く[■]一[■]命[■]と

拾[■]ひ[■]ぬ[■]い[■]け[■]こ[■]に[■]ゆ[■]り[■]一[■]旅[■]人[■]七[■]ハ[■]ま[■]え[■]一[■]が[■]り[■]一[■]地[■]の[■]人[■]を[■]哀[■]し

大[■]竹[■]敷[■]あり[■]此[■]竹[■]の[■]え[■]け[■]し[■]ね[■]し[■]り[■]一[■]し[■]ふ[■]し[■]ふ[■]し[■]り[■]一[■]身[■]の[■]あ[■]ら[■]い

に[■]送[■]ぬ[■]ぬ[■]七[■]日[■]二[■]万[■]の[■]多[■]は[■]あ[■]ら[■]い[■]と[■]あ[■]立[■]一[■]名[■]知[■]小[■]む[■]は[■]が[■]あ[■]ら[■]い[■]の

堤[■]の[■]崩[■]ま[■]て[■]田[■]畑[■]と[■]押[■]流[■]一[■]街[■]乃[■]古[■]板[■]倒[■]も[■]碌[■]と[■]一[■]て[■]足[■]と[■]入[■]し

の[■]地[■]か[■]一[■]横[■]田[■]川[■]か[■]し

ら[■]海[■]ん[■]で[■]も[■]唯[■]々[■]か[■]ま[■]ど[■]と[■]ら[■]ふ[■]と[■]中[■]の[■]命[■]先[■]拾[■]ひ[■]け[■]ら[■]保[■]

以蟹のあゆこを流す後田川を遠くまぬたらのやうに
は水にあと流さざる者道路は然位一或るを鮒と云ふて人
と後某の堤を越渡一水死の骸と守ぬる者鮒哭一魂といふ
わいあひとあふま一後田川を流りて松野牛も御牛と書て
田の畔よりある者河り廿半脊の上お流りて腹を仰ぐとのみ
かぢし其人の白きハテといふか者かか流水のいふて牛
小畑あづまものか一ぬるを社のまおぢ人あぢ牛と云てく
んぬおぢり一いふ予廿半とて梁の恵王のにと思ふのと
なぐる社の歌おぢりてゆふあはれお流水かてあ流き人あぢゆ
眺みはれか一不依て今日思ふ止宿一むね南たある

ゆとゆと一鳥のと居てる社をま立はあはれ近のる堤は
流きてまひく一後然よりあはれ社の入口おを膳あぢり後人
居て人とをぢりゆは生かえあぢりゆもてか一社の入口
たはまて田の中をひる十五丁いりあぢり股を侵し長ま
竿を杖と一まかゝるく一まか低くあに身を樹合のらふ
眺が餅屋のちかぢりもぢりも後地に向ふより表をり
いれお押ゆ一表ををんあましくゆは四五人解知す死骸を
い積上げて累しとるものぢり身山表は又大水かてあ
ゆも人死しとるし不予のあぢり人あぢりあぢり
十町半ゆをり一あぢり人のあぢり二階ゆはつぎま二階一這

ついで一命をゆり——と河は度々時愛^{エチ}川宿小居^{コイ}といか
守山の洪水をりて胸勢食也三——して難儀あり——とて^置
りして是もこの活のこし大津も以の入りか——あけをりといえん
石橋をどかく抜——てあり遠坂山々山中大小の川は——を
まを街は々わく流損——して一ありとををま

あつさう乃愛とあつたの水

つる祭

三十五

この村系は本宿町の宿宿へまがり舟をえりた京の土地々水船を
——とらうども三宗五宗の揚の舟も山橋は押舟——河原小々系在
の船掛る宿原——あまを凍^{ヤシ}に出る人もなく寂寥多ありねむさ
々大坂の急流もよく惟好め河原洪水の凡すのこあうく——

の船自倉中東氏の活小舟予まふ伏入へありお小あり——に
はえきほ協中書流ふとこ二階うねあきて海——とて淀の城
々堀のあ原か——又申又大坂々天海橋天神橋王女大橋五ヶお
原まうとらうども急流を舟は是——船——とらう原今り
清水にせうして伏入の方と遠をまらんか——山法をり西——
とまお小舟をりやわかと河で^す大坂の急流ありとらうくすか
^{シヤ}大坂^{シヤ}急流^{シヤ}とてらりあわ入あ損あわらる農具は道頓
津の是若く入も急と大坂中の豪家のもの一町く小畑合く流り
とが——或は白糸七ヶ原々自石を捨て又々草抄五ヶ原は千枚
か——舟上の急流小舟——とらり河原の土地ありと

半町人の身なりししむた意をわけるものとあじ大坂の町人
身より存ねるの家をなくして九折のあまのり損即出⁺て
村とくふ十人こそと語をを拾人をも大回小異に甘んじし
りて感嘆するものゝ大坂の地りのことのはむとて予清
方と足りしにやほ遠くはかりしにほ橋ありて橋取の社係
夫一母の半半をたらしし大荒廃ししに八幡山寺を
あ十八のりの方むべしあり

三十一

七月十日は大坂より京路東山の法水と告来りて文子日
六月廿七日の大風武の恩領進谷主の山に在りし一ヶ所は
又一ヶ所は十八の余印にまより朱のうをむしあ橋ををを在り

関宿拾級堂地は奥の海に中山の今あるはは留りてあ海を水
地人有し江戸の舟小川の舟三圍林葉遠く水は来り深サ凡五尺は且西
方におり戸塚遠くをより大川を入川に川水はなるは大井川に八
廿八のこし別家林の冷麻山ありしにありしや凡八尺大なる大風
を居こし風はくは^子音梅遠甲ありはは多しあわく大洪水
のよしあり

又日収小日廿七日の大雷とて大風を吹かしはるすれ大風を
まて大水をあま橋ありし代橋大橋村大橋もも小橋は色を
よそとて川上は下流孝隆お守り色を色に白くしし川上は下流
の川上は下流孝隆お守り色を色に白くしし川上は下流

此云まじしめ相生はあはれき千夜を奥所居たりしとてまじし
まじしはありいづれもあはれきありし

福とてあはれきしるせりあらのるははれき日

又まじしあはれき民とてあはれき功他、あはれきはれきし入し

まじしはれきしあはれきありしあはれきあはれきあはれきあはれき

あはれきあはれきあはれきあはれきあはれきあはれき

あはれきあはれきあはれきあはれきあはれきあはれき

あはれきあはれきあはれきあはれきあはれきあはれき

あはれきあはれきあはれきあはれきあはれきあはれき

あはれきあはれきあはれきあはれきあはれきあはれき

あはれきあはれきあはれきあはれきあはれきあはれき

あはれきあはれきあはれきあはれきあはれきあはれき

あはれきあはれきあはれきあはれきあはれきあはれき

あはれきあはれきあはれきあはれきあはれきあはれき

あはれきあはれきあはれきあはれきあはれきあはれき

あはれきあはれきあはれきあはれきあはれきあはれき

あはれきあはれきあはれきあはれきあはれきあはれき

あはれきあはれきあはれきあはれきあはれきあはれき

あはれきあはれきあはれきあはれきあはれきあはれき

あはれきあはれきあはれきあはれきあはれきあはれき

あはれきあはれきあはれきあはれきあはれきあはれき

世の秋のさいしんしん山の翁のゆ
る冬

三十八 鹿田の蜺ニギヒルけ、利蜺リニギヒルかして、多由のまの、あや、盆も、権も、縁
け、流し、げ、修、梅、又、喰、ち、魚、し、ん

三十九 といの後山、石の、又、の、ま、と、平、松、砂、川、道、を、し、右、し、も、小、ま、る、く、え
由山色、那、く、し、し、伊、原、の、め、或、も、の、あ、り、ま、の、清、秋、を、る、が、や、し
後山、う、は、る、日、は、も、流、く、げ、や、日、は、ら、る、東、海、の、ま

といの後山、神、謝、を、二、は、不、信、く、木、一、國、の、ま、う、り、一、時、修、藏、深、ち、神、と
い、者、漁、捕、の、ま、と、司、る、湖、水、小、漁、り、ち、大、謝、と、年、と、ち、ち、好、軍、あ
小、成、ん、と、の、漁、捕、の、人、を、る、に、う、り、て、魚、を、小、よ、び、あ、ま、り、と

四十 二上山、々、ら、秋、と、あ、は、よ、の、ち、六、世、流、と、え、遠、と、う、山、松、の、中、あり
頂上、二、四、の、ち、小、池、あり、と、ふ、人、曰、三、上、山、の、麓、小、洞、穴、あり、洞、の、口
と、う、山、又、斗、中、の、ち、ち、度、一、人、あ、ま、り、て、深、く、入、り、比、佐、を、む、と、山、と、う、ふ
山中、の、蟻、蟻、の、る、む、煙、一、た、表、の、白、む、い、と、山、の、鹿、田、を、り、一、里、斗、小、一、て
山あり、と、是、と、と、二、上、山、の、鹿、田、を、り、下、を、小、ち、と

四十一 二井寺の滝、は、て、た、く、え、世、俗、の、ま、は、一、巻、法、の、信、が、ふ、ま、り、ん
あ、ま、の、敷、山、へ、り、上、ま、り、一、時、も、も、て、後、の、疾、と、ま、り、一、と、り、す
情、も、あ、に、は、流、く、一、の、中、に、埋、ま、あ、り、一、と、の、あ、り、は、流、く、と、す、也
流、一、る、ま、り、ん、又、大、つ、の、内、に、存、ま、り、陣、鐙、と、り、あ、も、の、あ、り、も、り
凡、湖、水、の、眺、を、三、井、寺、の、山、上、り、一、と、も、も、志、聖、教、の、眼、下、の、人、か
ろ、す、に、一、及、ふ、ゆ、し、ん

取の下に取寄をいふも又世ふる番とわびりてまう古たの目録
印の次第は遠城とて旅人ともほせり取の下に武まあり旅人
して弟店と業とんお中をりの人廿ありとれ者あまは別
らまをきして三業は遠く思も今も店小の家をきさるのハ
送風ありとふ一取ふと廿業店の人ハ長岡王宮として射術の
達人ありといはふ

△是より下の下寄りの法とある

ハの書もは女ハ千代小おく契りてあり日取と浪のハ取寄あり
はふるもまとものはのち日代板倉屋かくあまはしてまどくは保
ちやとりとくわひのちとハ板倉止半とゆび若干の今とて

ハ千代と名法してこまハの取寄ありまふ一はハ一取と記取せ
らる別ハよはもまに記取ありていし一はまハ千代が名よ
一は地をう一傷年取及も清亮の法追き甲の二回ハわとま
きけかおのあけ一ませますまも山ほとまじと向てまひ
一ととやまどとくは能くんとしハあ見れその後ろとて
ハのまハ序路一とみ思

鳥を先慶のの取ハ鳥を中をまわんとこの比半のれららの
群ハ牛と掌もまのりあまると同わあれあまるとまのりあま
まを返る先慶ハ毎は廿牛と取あて廊ハをいといぬ

車の上に種を敷きわたるは骨を後きりて自若くしてゐるひし
とど ねは掃摩子 けうしともむしーいさくとけりてー原の地置
をいーいさうい合をせり

四十五 板倉屋いーあひ代の時まづくそ家尻廓一をいあひあひ其々下に
白垢子やを下小白垢をを月あふーとーいさく湖原の雲小あ
ーいさく湖原の雲小あふーとーいさく湖原の雲小あ
けり二宮橋の好光あふーとーいさく湖原の雲小あ

四十六 板倉屋法中より日さー板倉の女中宗物小りあひぬ信て板倉
上解解せしきき又例の女中宗物小りあひぬ信て板倉
とさく物置の小のりさやと同一む証者出でていさく湖原の雲小あ

かしていとさく板倉大小怒りすて地置と法中の中央小あふーと
よのあふーとさく湖原の雲小あふーとさく湖原の雲小あ
の合をせりあひあふーとさく湖原の雲小あ

四十七 大水八本法中願城局に暮暮書之抜あふーとさく湖原の雲小あ
田あふーとさく湖原の雲小あふーとさく湖原の雲小あ
あふーとさく湖原の雲小あふーとさく湖原の雲小あ



補任願城局之事 為

卿家思はる方 雖は信付就
不候の政易しとさく湖原の雲小あ

新編神重信（左） 治令事

右の人其被免りま也仍所

公用年中に拾遺書又鳥羽有

有る少は之被治人（注）就若就

之ゆは之能くは付可る所

以易之也仍補之件

春日修理大夫

大永八年五月

仲康

文中の竹内新六郎を信の堂上竹内殿の先祖の春日河原

太夫仲康の我家の流を承りありとて（揚中氏） 竹内殿の流

小姓女と願成とよあふとて思ふは太夫

追考大永八流御原流即字の事同七年後奈良天皇

即位大永八年八月号禄元年（一年旧号大永八年小字）

東遷三冠者願成別第三神元元一タリ室所ノ時ホナリ遊女願成去大ニル

四十八 寛政十二年九月廿五日の東山双林寺に於て展覧するその時の相

花城書画目錄一冊京の友人のとて借し之を花城

中予研いとかし依てあるありとてと騰写し

一近信應山（廊名） 園白吉野出廊の付述懐の文 （カケテ） 賀樂相支和系

一大永八年願成爲墓事書 （原本有之我家） 香果主人の系

是亦抄写者

一 唐土^{モロコシ} 東人^{アジヤ} 唐土東人共京奴

一 八宮良純親王^{廓名知恩} 短冊^{短冊画 智相之紋}

一 元政法師^{在信口日念ふ尾} 短冊^{蓋玉作八千代}

一 大協出廓の時^{仲河果香色和奇}

一 八の宮^{八千代の色紙二幅対}

一 八千代^{マサキヨ} 之文

一 八千代^{マサキヨ} の字

一 三條^{フタタテ} 隆^{リウ} 尚書^{シヤウ} 和奇^{ワキ} 二幅対^{ニヤク} 二条隆衣寛保年号の故山服東洋化した

一 大協^{オホキヨウ} の文

一 小^コ 小^コ 小^コ のこり

賀樂^{カク} 和^ワ 丈^{チヤウ} 少^{シヤウ} 奇^キ

同

同

柳^{ユウ} 卷^{ケン} 扇^{セン} 少^{シヤウ} 奇^キ

同^{ニギハヤ} 美^ミ 金^{キン} 所^{ショ} 奇^キ

同 栞^{シヤク} 金^{キン} 少^{シヤウ} 奇^キ

同 井^イ 筒^{ツツ} 金^{キン} 少^{シヤウ} 奇^キ

同

大^{オホ} 治^チ 氏^シ 少^{シヤウ} 奇^キ

一 三^{サン} 四^シ 奇^キ 川^{ケン} 少^{シヤウ} 奇^キ

一 薰^{カホル} の色^{イロ} 紙^シ いほの延を年号の故

一 大^{オホ} 協^{キヨウ} の字

一 げ^ゲ 文^{ブン}

一 別^{ヘツリン} 人^{ニン} 大^{オホ} 協^{キヨウ} の色^{イロ} 紙^シ

一 村^{ムラ} 吉^{キチ} 原^{ハラ} 花^{ハナ} 扇^{セン} の字 安永年未ノ書

一 日^{ヒツ} 短^{タン} 冊^{サツ}

一 佐^サ 仲^{チュウ} 紹^{ショウ} 益^{イキ} の綴^{ズイ} 人 紹興寛永年号の人号 灰を蓋吉時支

画^エ 軸^{シュク} 十^{ジュウ} 五^ゴ 示^シ

一 八^{ハチ} 千^{セン} 代^{ダイ} 派^{ハハ} つ^ツ 卷^{マク} ^{スル} 自^ジ 画^エ 潜^{セン}

石^{イシ} 川^{カハ} 氏^シ 少^{シヤウ} 奇^キ

川^{カハ} 湯^{ユウ} 氏^シ 少^{シヤウ} 奇^キ

柳^{ユウ} 卷^{ケン} 栞^{シヤク} 金^{キン} 少^{シヤウ} 奇^キ

同 酸^{サン} 漿^{シヤウ} 金^{キン} 少^{シヤウ} 奇^キ

同 平^{ヘイ} 仲^{チュウ} 金^{キン} 少^{シヤウ} 奇^キ

同 西^{セイ} 村^{ムラ} 定^{テイ} 雅^ヤ 少^{シヤウ} 奇^キ

同 汎^{ハン} 打^ダ 氏^シ 少^{シヤウ} 奇^キ

同 水^{スイ} 村^{ムラ} 氏^シ 少^{シヤウ} 奇^キ

同 賀^カ 樂^{ラク} 和^ワ 丈^{チヤウ} 少^{シヤウ} 奇^キ

一光琳節分の探花街画宝取

一挺女の古画

一海邊如真画挺女人江の像 上ノ粘大い

一大橋自画像

一いはいの画

一ち橋自画像

一寄生自画像 トウキ

一長子の画像 吉田元徳画長子の文を以て師

一長谷川長春挺女の画

一時代挺女の画

同

同

樋口氏少系

柳巻美を少系

樋口氏少系

奥川氏少系

西村氏少系

吉田氏少系

西村氏少系

柳巻美を少系

一濃紫下送唐画 濃紫は天明年中考原の女

一翠雲樓の圖 丸山庭園手画

一戲 五十嵐村と市画挺女果の文をもつて師

一柳 次里茶於木はの廓指墨の画

卷軸ナミ

一八小代 小代純書初子二巻

一八の宮内 子投子

一二代春井河書の春画

一延宝年中挺女子巡

一同別 子

同

同

三雲氏少系

付井氏少系

西村氏少系 元順右少系

中山氏少系

柳巻美を少系

柳巻美を少系

らは氏少系

二年前 濃紫は天明年中考原の女 翠雲樓の圖 丸山庭園手画 戲 五十嵐村と市画挺女 果の文をもつて師 柳 次里茶於木はの廓指墨の画

和州家澄^{ワシラカ}の腰屏風 延宝年中

徳宗^{トクノ}の遺^ズの石花屏風

托女の画屏風 長谷川長春画
古田里高書

額二子

大徳^{セキカ}夕佳^{ロウ}樓の額

清人^{シニヒト}の柳揚柳塘の額

衣^{ヒト}衣^{ヒト}三子

或^ズ托^ス女の袷^ズ衣 光琳画
松竹梅

徳^{トク}母系^ノの袷衣

二代目^ニ古^コ中^{チュウ}の章

当日^{ツギノヒ}席^{シヤク}のおお^ウり^ノ不^フ物^{モノ}凡^ニ十二^ニ種

古^コ中^{チュウ}より尾^ビノ^キ芳^{ヨシ}ニ^シ夕^{ユフ}の色^{シキ}低

一^{ヒト}博^{ハク}隆^{リウ}達^{タク}の書^ノの投^{ナゲ}テ

一^{ヒト}長^{チヤウ}波^ハ托^{トク}女の裳^ノ清^{セイ}人^{ジン}程^{テイ}赤^{セキ}城^{シヤウ}寺^ジ飯^イ人^{ジン}の合^{カウ}書

一^{ヒト}清^{セイ}人或^ニ托^{トク}女^ノ小^コ短^{タン}の尺^{シヤク}牘

一^{ヒト}圓^{エン}山^{サン}直^{チキ}筆^{ヒツ}画^ガ上^ノ地^ノ之^ノ像

一^{ヒト}鯛^{タイ}を^ヲ負^ヲ柳^{リウ}室^{シヤウ}の^ノ托^{トク}女^ノと^ト添^{ソヘ}する^ノ投^{ナゲ}テ

一^{ヒト}八^{ハチ}千^{セン}代^{ダイ}大^{ダイ}和^ワ其^キ用^{ヨウ}三^{サン}子^シの^ノ和^ワ奇^キ 具^具角^角ハ^ハ進^進書

一^{ヒト}西^{セイ}洞^{ドウ}院^{イン}の^ノ茶^{チャ}合

一^{ヒト}夜^ヤ未^ミを^ヲ在^ヲ 母^母の^ノ詩^シの^ノ杖

望^{シヤウ}東^{トウ}知^チ丈^{チヤウ}少^{シヤウ}年

柳^{リウ}卷^{ケン}善^{ゼン}公^{コウ}少^{シヤウ}年

大^{ダイ}清^{セイ}氏^シ少^{シヤウ}年

丸^{マル}山^{サン}西^{セイ}河^カ保^ホ少^{シヤウ}年

柳^{リウ}卷^{ケン}友^{ユウ}少^{シヤウ}年

某^{コト}氏^シ少^{シヤウ}年

望^{シヤウ}東^{トウ}知^チ丈^{チヤウ}少^{シヤウ}年

望^{シヤウ}東^{トウ}知^チ丈^{チヤウ}少^{シヤウ}年

小^コ林^{リン}氏^シ少^{シヤウ}年

日

之^ノ名^ナ氏^シ少^{シヤウ}年

日

田^{テン}中^{チュウ}氏^シ少^{シヤウ}年

日

其^キ名^ナ氏^シ少^{シヤウ}年

柳^{リウ}卷^{ケン}友^{ユウ}少^{シヤウ}年

回^{クワイ}格^{カク}友^{ユウ}少^{シヤウ}年

一 法宗の護刀

一 友成吉妻の久

一 延定年る延女日世

以上二つに併

予も亦此の如く日すの言尾ち極るゆき芳春も川は内小去又
らやうんを女中七人の色紙短冊とせうり古奇と云ふべきあり

又自 祿のすも何りしゆゆを去りし

廿五

石寺中 没年寛永八年六月廿六日 亡はる本融院妙供と云此寺中
紹益小法出さる紹益は成をともしん豪富なりしに寺中紹益由是
うらて死に

紹益 紹益の如く日すの言尾ち極るゆき芳春も川は内小去又

此の時時休懐の奇し或人曰く一の死を火葬して紹益自刃す

世を喰ひそり紹益うすし世におしえをさるゆゆのめし是より

して成りのあ甚えをりしと云 淨亮法

廿二

七月十七日 陽中 師死ともしん 兼君古時か能く益え下何中
と問ふ兼君は信成氏京師あ型四二京下るわ小信成一醫を業と
す兼君はより中か夫紹益の縁今甚て寒家とあり世傳
中兼君曰世成氏を紹益のあを智恵先ちと云云はありし紹益
を和奇と云ふ 此 謝朝兼君と云ふ尾成氏所の由へる世をなく
出るより 子孫を古我後してさう後浪前の山塘氏より妻と云

同三文字を云

山寺と云ふ子孫

野山法氏云

海定公云

金伴合ノスリハカシ甲上區無咄音色 以三ノ上ノ珠襖也 不亞モ又コレヲナシ

右白洞のぶらゝえのきと印洞のくわびのくまのぼろぐー金取酒

盃られのきもの細工

五十三

常徳又曰信益の菩提寺を内野新地立本寺にあり 日蓮宗 此寺を

の以今出川寺町あり 一ノ内野地とあり 其のら今の地ふり

一時墓も建つて小や石面小信益とあり 戒名ニ行り

ほりけしあり 信益ハ八十一歳にして没す

元禄四年十月十二日

古徳院 紹益

本融院 妙供

寛永八年六月廿三日

此石碑の年号をもつて考へしは古徳院が
没年々信益ハ松原の墓ありと云ふは
一ノ中ノ信益の墓とありて信益ハ一ノ中
ノ中ノ信益の墓とありて世と云ふは一ノ中

友人高橋ハ京師の人ニ迎曾古徳の墓を圖して作せり 其の

是は清原の廓を寛永十八年ニ藤柳の馬場と云ふ今之ニ所町ハ

一ノ中ノ信益の墓とありて世と云ふは一ノ中ノ信益の墓とありて世と云ふは一ノ中

箕山ハ貞徳門人 兩巴 應言 好色 大 極 下 三ノ上ノタムル

箕山ハ大徳ノ一ノ中ノ信益の墓とありて世と云ふは一ノ中ノ信益の墓とありて世と云ふは一ノ中

合セ申上リ

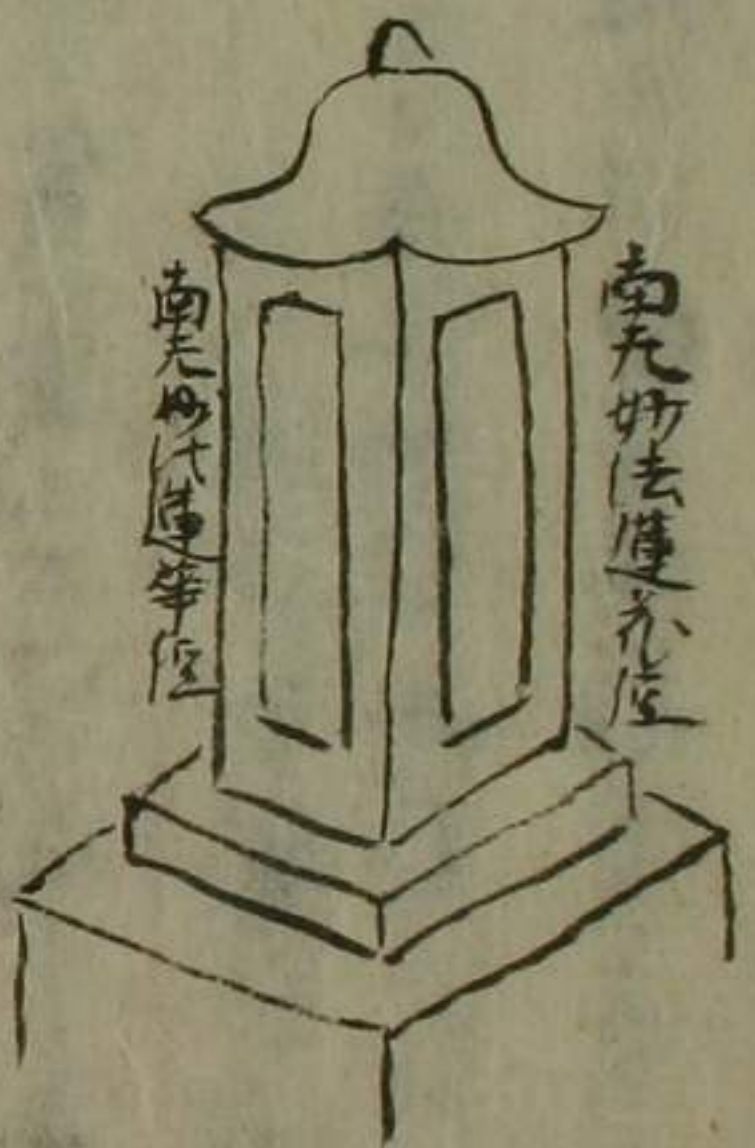
古徳の塚を治小石を考へ日蓮宗 檀場 字堂の傍にあり 其の題目の下に

戒名あり 唱念院 妙達 日性 右のり 題目 じり 裏に年号 寛永十二

癸未年八月廿五日 去申々 東山 大佛馬町 ね田氏 小浪士の女児

元和戊午年 出生行年三十一歳 崎人 信と云ふものに載せり

か回一...
...



南无佛法蓮花座

南无佛法蓮花座

業原小信益々奇く...
...
或時信益が...
...

五十四
...
...

一ツはあじいあき投き土地といつてもは女町といふのも倍ありて
 凡洛中とまは皆妓院へ来たの命儉か人守りして行多きは女町の
 まくに世よりする半津一の不思議もは春景のる他はの人と不
 二も他の人といふこははるあやのる土地の人といふ二指人といふ一ありと
 一不後子の考あ者他國人のこしに依に依あやの内におてさしー、
 祇堂の妓院いふこはとふものあり是を祇堂町といふしめて出る
 ラマ。藝子むらめと稱し粘入の依と堅ににりてよりに切れそー
 是へ藝子 **誰** 又ハた中海誰あだしううくさるーて
 中海く(配)し東家の住い元あひハ階子のよりワ小又投きも
 かくは付てありは中海も藝子もえせと内ハ別へえせとと

五十五

和京ノ藝者再所ト行枕書ハハは戸ノ見城申

い戸めとふえ場い九方井百あどのあなを注々何と定
 直心抱の藝子も有又あまの藝子から家ありて恒もあ
 ほど客何と必其のえせへいしてつるふしあけを々別あしそ
 祇堂町中山拾町小限てゆ免こはも包下てえせといふ又し下あ
 ておあふ出るもの成腰えヲリまうけヲリといふい戸あて何あが
 りといふがめし又れ小皆白いをい何町の仲居ありあといふも
 書し

大坂治のの業河風呂ヲ存
 ちり子
 えんや
 せま

房中ノ秘
 中治
 かう
 いのうさや
 アタイノ下

二条をさる方のこのちやう

中法

いし

あつしや

三ツ

ミカミの三葉をあらゆ

振袖

はの

あつしや

中法といふにやうな眉毛か—中法といふ中といふはけいひに
ら—の長きに拘りけいひといふは祇堂の藝子といふはけい
くたやぬい若き下りものよに替ひありておやぬの上法と
に益事か—またあつのこころ—つめてはしらのあつものか—

五十二

京の女郎といふは女中といふはぬといふは目下の人か—い
げう—やといふは—藝子といふはぬ—はつはつはつをりてむい

五十三

らうとは切を相場とまくと—不花の目共—に別行く名をきり

但入用ニワリニシテ

私目

けをる後人客と—二別をりききすと—花をたけしおおつをゆ定—
すめあつしや—他の人か—捨ちよ—をゆりてゆ定—は本料理系

なまはか—又京の祝言の客とま—ふと—掛—ちある掛い—
とま—人客とま—人—はゆ定—ゆ定—ゆ定—ゆ定—ゆ定—ゆ定—

まひ—ゆ定—あり—ゆ定—ゆ定—ゆ定—ゆ定—ゆ定—ゆ定—
京地の風儀とま—ゆ定—ゆ定—ゆ定—ゆ定—ゆ定—ゆ定—

はく—ゆ定—ゆ定—ゆ定—ゆ定—ゆ定—ゆ定—ゆ定—ゆ定—
とま—ゆ定—ゆ定—ゆ定—ゆ定—ゆ定—ゆ定—ゆ定—ゆ定—

肌もきき—ゆ定—ゆ定—ゆ定—ゆ定—ゆ定—ゆ定—ゆ定—ゆ定—
質人—ゆ定—ゆ定—ゆ定—ゆ定—ゆ定—ゆ定—ゆ定—ゆ定—

祇堂何れもあらずとも日大らとらひとふとまふし世討せや
 誰ちりり人小僧などあらずとめるもは年中あせを汗してらぶ
 せふぬにはしき音も皆一所小僧ちりりんの帯と角申せうひ
 の中小僧傳まの帯あど志たふも稀小あり

空の浴衣の帯を少て解し故に又庫たかちちるを入てもちらふや

関中たのいす除のゆきとあざとをいれりや或は塗骨の法府

にはよ々た施塗のあらずも東扇とおし涼原の廓祇堂何れも
 にはよ々た即り涼のうすも又蒲団をとりて大はも回りの戸を
 涼たの涼原をまゝた熊子蒲団ニツマニリはま
 涼たの涼原をまゝた熊子蒲団ニツマニリはま
 涼たの涼原をまゝた熊子蒲団ニツマニリはま
 涼たの涼原をまゝた熊子蒲団ニツマニリはま

せうくのあ

六十四
 涼女の風儀ハねあらずとけりつけた松とよらうきとげ色と見え
 せうのあした留たあしとけりつけた松とよらうきとげ色と見え
 せうのあした留たあしとけりつけた松とよらうきとげ色と見え
 と改小してまた涼原を塗たと用申



髪ハ子に切てあ
 髪ハ子に切てあ
 髪ハ子に切てあ

髪ハ子に切てあ
 髪ハ子に切てあ
 髪ハ子に切てあ

私云
多々わ
アウズ
アウズ

梅屋所の方を小い戸をしてけやとりふせむとてあてていふを
あぢとていふとてや々。あぢも常なるあぢとていふをといつ
ていふにせむかといふ。まゝのまゝとていふ。いふにせむかといふ
あてていふをといふ。いふにせむかといふ。いふにせむかといふ
くもあぢとていふ。いふにせむかといふ。いふにせむかといふ
いふにせむかといふ。いふにせむかといふ。いふにせむかといふ
いふにせむかといふ。いふにせむかといふ。いふにせむかといふ

いふにせむかといふ。いふにせむかといふ。いふにせむかといふ
いふにせむかといふ。いふにせむかといふ。いふにせむかといふ
いふにせむかといふ。いふにせむかといふ。いふにせむかといふ
いふにせむかといふ。いふにせむかといふ。いふにせむかといふ
いふにせむかといふ。いふにせむかといふ。いふにせむかといふ

いふにせむかといふ。いふにせむかといふ。いふにせむかといふ
いふにせむかといふ。いふにせむかといふ。いふにせむかといふ
いふにせむかといふ。いふにせむかといふ。いふにせむかといふ
いふにせむかといふ。いふにせむかといふ。いふにせむかといふ
いふにせむかといふ。いふにせむかといふ。いふにせむかといふ

いふにせむかといふ。いふにせむかといふ。いふにせむかといふ
いふにせむかといふ。いふにせむかといふ。いふにせむかといふ
いふにせむかといふ。いふにせむかといふ。いふにせむかといふ
いふにせむかといふ。いふにせむかといふ。いふにせむかといふ
いふにせむかといふ。いふにせむかといふ。いふにせむかといふ

いふにせむかといふ。いふにせむかといふ。いふにせむかといふ
いふにせむかといふ。いふにせむかといふ。いふにせむかといふ
いふにせむかといふ。いふにせむかといふ。いふにせむかといふ
いふにせむかといふ。いふにせむかといふ。いふにせむかといふ
いふにせむかといふ。いふにせむかといふ。いふにせむかといふ

六十七

奴のふかむしめしめとらぬおもし書に見わるとのくはけりてハ
ゆきふと書林のあぢしつづもりて書かざるとさづなりあり
菰ふたれのふかひのまねいさじんねもゆきもかもし書又事
はの方よりいれ文はつれしづがなり句し

六十六

今梅屋あしあつてつづつ小唄と人のうたひてゆきまじり
まじり

あしあ梅子ニよりこといはずて書い下書あどりのぬ
はつてり

海老のサアヨウマこからこのぬが月にぬまんのサアヨ月小九も
んのんことありまじりサアヨウ

このこととサアヨウマこはわくわくしてかゝ物とよみんでサア

まじりまじりのんでとたふなりほんサアヨウ

この先サアヨウマこはぬが月とつづつサアヨウマこはぬが月とつづつ

このこととサアヨウマこはぬが月とつづつサアヨウマこはぬが月とつづつ

このこととサアヨウマこはぬが月とつづつサアヨウマこはぬが月とつづつ

このこととサアヨウマこはぬが月とつづつサアヨウマこはぬが月とつづつ

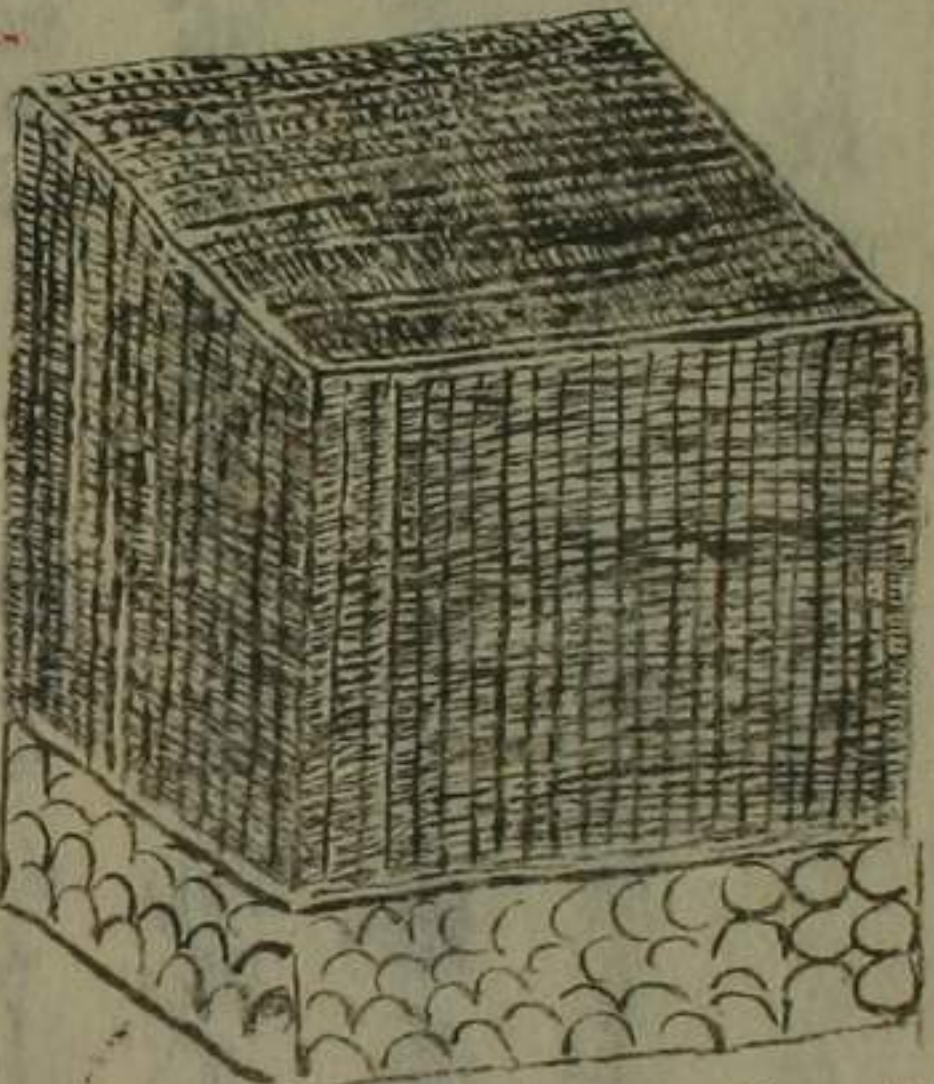
このこととサアヨウマこはぬが月とつづつサアヨウマこはぬが月とつづつ

まじり

七十二

此の... 中一人と... ぬか

此の



川原の... 又二... 又此...

七十三

此の... 此の... 此の...

此の... 此の... 此の... 此の...

此の... 此の...

此の...

やぐらのひらふきまはの

裁記とてしるし



当居のほらうら

小一丈後おれ小るゆを
おてきて野之乃のま
はくはらうじんは
とまらへくものか
うつておれ風袖して
山はくとあうくかり

七十四

看取は江戸のふかき居のれくふしてむあ藤へ坐居し内小厨^{カヤ}あり又
意者すりぐく者ゆるじ受て世ありてぬおびして是居のうらめて
あせととほへー決会するも自中し又む^{ミナ}れを真直ふはさる

突あうりに切幕あり又首巻の小のうらむ切幕ありては若きと
りもおほい切幕のうら小簀のより天井か切幕の土居にあて被
くはへかく地割とせりいふ坐居の土居乃後と坐居ゆり又化りしもの
大入のせおれ後並の坐居ゆり上下の被おれ江戸もはく一側
たるふら又被おの向あへりりゆらありて江戸の坐居とて立爪
かりの上りい麻上下あてり幕のぬ花はゆる中あておてねら幕
代は割とらと上又あててり幕の中ふ入とのぬ物もあて幕を
ゆきせわかーらぬきーなるものし又上被おは人あてま
ふりてふゆはは人あては又物人のぬりゆと腕を肌ぬて
あてはらび江戸のゆり角力のや又被おのねたに桐の木ハシの聯を

四五帝尾上村七鯉三神以村四帝忘忘年女秋中村念許八十餘年若良

いろは女秋当付市川たてもり妙高野子ホ少捨中大岡記の記言一切犯

云小川八人の喧嘩と云限し村に云て三幕一尺者三帝は是れ

里人存妙の活判し大入し予ハ八月七日大坂の海に掛けられぬ

宗大坂もは是れ下海に先板小沼者の名と書けてし是と本戸

か出れぬ戸の向やはり芝居のめしと芝居く小沼者入切りあり

此年宗もは宗二羽の芝居一借小出来び打て勢小息りもり或は

宗の向をり押すと沼者したを建もそもに大坂川打りて再び奥

りすそよあり又大坂りも宗へおりて奥のりすそと年三羽とも

芝居ハ少しく甚へたるそ世の中力下りともあるべし又大坂りも宗へ世

のひと沼者の名を板とたをり位脚のめしと他のは候とを

アハ沼者名多多くちぬ小沼者れ何とあ他らうしくそ板のぬ

因幡多師妙ゴウ二角堂ゴウ取ゴウ舞ゴウなじわくに小芝居あまど大坂の中

芝居ハ小川かん大川ヨシ渡スガ法ガリト

七十五

夫の体の名を鏡メか之宗の橋上より此とわがて四方とをたす

ハ師山より海ミ海ミて尖ミハ川長く流れてり或よりし人妙又

柔ミ和ミ小ミと法ミとやミもの争ミ海ミをミかミ小ミあミ者ミ人と罵ミりミ上ミ小ミの

風俗事ゆい自然不徳りま小もは神相魚の他は十古万宗の

帝王のまし海ミハミ史ミ多ミべし予ハミ生ミとて三十一ミ年今年今下り

て宗師小坂比信腸とありぬ

私日記

七ツト

京小よみぬ七ツあり。婦人、賀茂川の水守社、織也、漆也、豆磨、扇子。

又不可分との七ツあり。人々の香燭、料、向、水、便り、牛の在、故、投、ま

木男女の溜、傳、ま、じ、い、え、け、つ、成、もの、七ツあり。裏、之、そ、ろ、人、喧、嘩、

は、又、法、大、佛、御、せん、ト、京、本、佛、合、御、を、ろ、男、女、実、有、故、見、れ、又、の

私日記

け、つ、ま、も、の、い、出、火、又、京、の、麻、下、味、寄、御、大、い、を、ろ、若、良、品、を、柳、の

あ、り、する、ま、ど、い、に、え、別、ぬ、ま、り、出、火、ある、耐、々、その、町、の、裏、ち、り、一

間、ぐ、小、船、あり、く、その、ち、裏、お、日、ら、お、さ、ん、候、こ、ご、ご、り、ほ、し、か、を、手、を

い、出、い、ま、ま、と、門、く、と、言、は、ま、志、め、す、い、い、や、と、水、に、依、て、お、り、く、立

出て、お、火、の、炊、子、と、風、の、ゆ、よ、に、より、て、お、柳、お、り、と、ほ、入、お、折、く、上、も、あり

又、新、ト、にあ、れ、も、あり、大、火、小、い、ま、側、の、町、お、水、守、も、表、の、戸、を、開、け

行、沈、と、あ、ま、と、に、え、世、先、へ、出、て、め、と、ぬ、る、く、し、お、火、小、を、ろ、く、お、柳、沈

ち、い、し、ま、り、と、り、翌、日、お、ま、り、て、上、ト、と、え、く、お、火、又、京、に、お、れ、火、と

遁、を、怪、お、あ、ま、と、ぬ、い、喧、す、ゆ、え、大、消、小、か、は、も、の、の、火、も、お、あ、ま、す、ら

し、又、京、に、て、い、あ、天、も、も、合、御、と、志、せ、ば、も、一、合、御、と、志、す、ま、人、必、遠

足、す、と、も、あ、り、も、い、お、京、に、お、あ、核、お、好、く、い、ぬ、小、風、ほ、い、て、真、出、京

海、に、い、は、の、め、く、核、志、お、あ、名、消、お、ど、い、ふ、も、希、い、よ、う、て、真、の、耐、友

と、ん、る、と、京、地、と、い、え、り、又、お、テ、ハ、ヤ、リ、の、高、人、々、甲、掛、御、ま、と、し、ま、京

と、ぬ、お、て、る、お、柳、ま、ち、お、腕、町、と、い、代、の、若、也、ら、を、ど、ご、り、ま、い、

此、の、ま、ま、で、お、ご、り、ま、い、と、い、い、ま、ご、あり、ト、お、流、の、並、時、を、何、つ、く、ま、

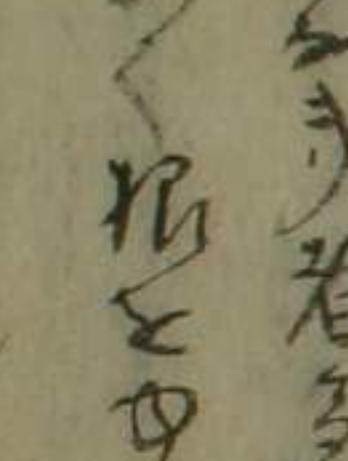
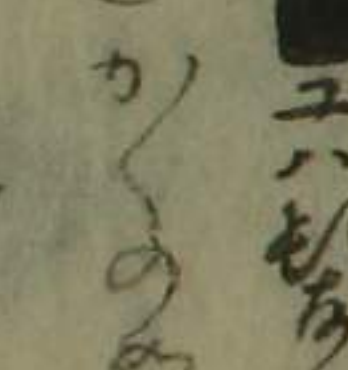
私白京仲
江戸の婢
大八事
ナシ各言
車一リ

是らに扱き成し又有に捧かく商人のらどくせやくかんじんやくよ
らくとせきなりりくもあやうし車を牛のむらびりて人のけりあまは
一人先小世スと儼と物スし肩ス入てせと川ス後ス押
毛の声とたてが名をいせともはけのめー又あ中傘はりてせとがた
く者ありテはえんが京小入る付あはるり予うあやは一人足凡
八九市目のあ樹とくはさかうし傘うしと三里の路とゆくすい戸
人共目わを以てスおそ京のけりま甲樹御まとはさうすとみ三尺
も試とめる使者も額とぬいび月代の毛を長くまびるに花備
ふける者一人もス一人は小松法をどほりものあする者もあり
又高はきガ籠とねびガもあはるり或はも人二つのおと握ひ一人

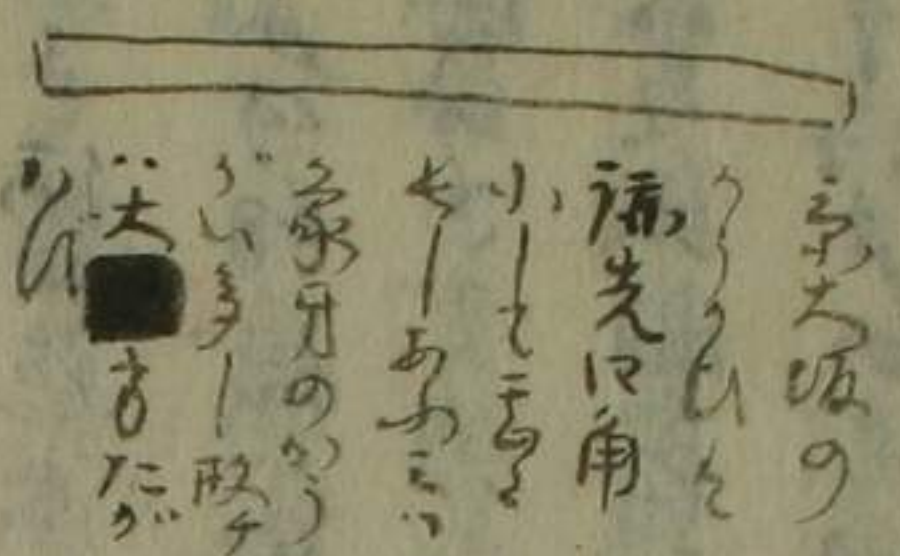
車スとくはあやう者ありちほも又くのめーしスとくはすい戸
小限る所の熟法ス

七十七

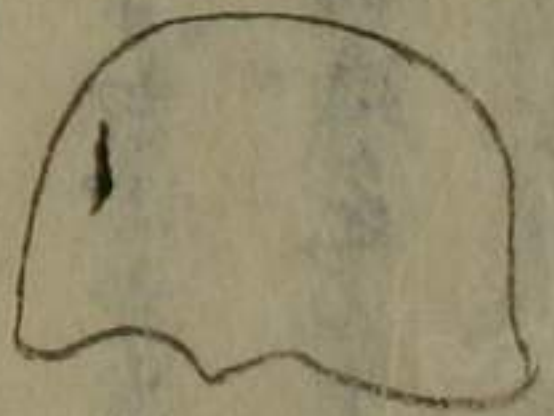
男子のお城スいふ人にとび大男あまはあもすあはれもはさる大は
お城のさびりしス神とすりしスいしあゆお城スあするはあさ
らんれ又朋とと上はあをるわくあふくしスたまはともあはれ
りし江戸の老お城スお節スあはれりスいしスたはあいの都
はあろのさ又白法の日傘ととんス答答竹葉スいしス聖あはれお城ス
多く画ス三六スあまき若多し又男子の髪スの凡々スあを尾ス曲スり
尻と曲スうらぐわしきん人え結スニッスあて折スと結ス結スあひの十女の



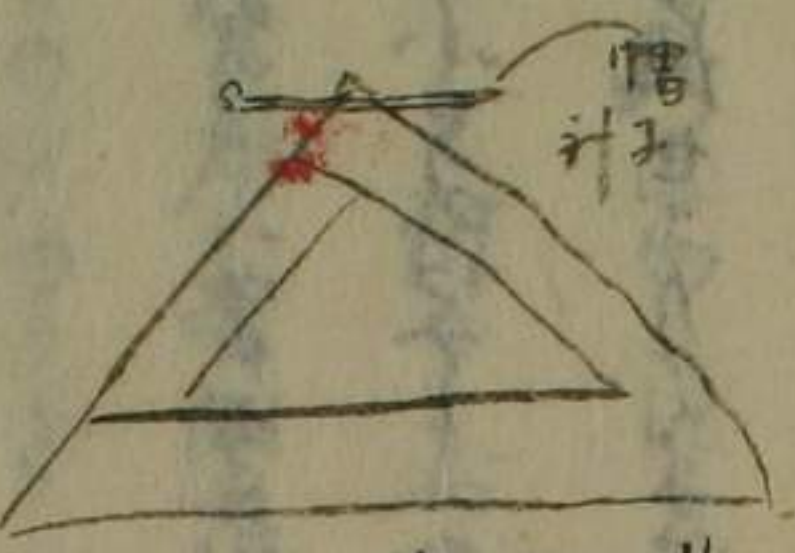
法をうけつて不自然な風より世風え大坂より傳りて
 京を變法りつてもあつた大坂小及び又醫所の地盤に
 かゝりて地のよくは女子は他より小か多し帽子と
 衣服
 手ぬぎ用女子は赤や青のとりとり



京 木松多し
 時後青貝へふ
 只角してをまし
 大坂の髪甲の
 花或は赤牙の
 赤地く我々
 前法ありき
 物のひげさ
 ませし



京大坂小て
 孝く婦人
 ちあつ少
 巾着へ包



此帽子京大坂の
 町家の婦人等に
 匣中注来小用中
 三拾年以下は
 いろした女にまき
 とる也



祇園石壇
 阿まりのいろ
 比五尾の帽子
 つまみかく
 一愛女し



大坂して今も
 婦人の法
 以て化粧を
 化粧をりのあ
 との別長をく付
 て白く



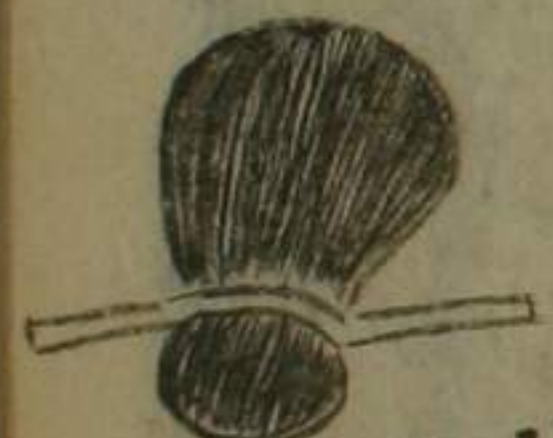
是も
 上小
 同



ま髪子
 いろ小切
 赤の髪
 のでを



京大坂は髪のかほ
 いろを赤の髪
 くりと赤
 い戸のつくり返
 とすものに似たり



尾髪造り
 所迄眉毛の
 かま女の髪
 中へは



大坂
 三拾年
 赤の
 髪

通字子孫丸

時々荒廢は跡を遺して下界のくちまうを思ひ世多き法の新てづ
ら〜〜のち小具と夫ぬ夫々火を十のう方か何時火と長か
ほふとに二時の莊況しものには妙法の火次にたり■
次に私取の火次小入字火し十一日星よりありしと感の取止ぬ
あふとも今夕大入字火と長とび十七のう方火と長とりとの
皆十のう方り〜〜と長とりと長とりとはこま々方一付火と長とり
農民の山登りし火と長とりとはこま々方一付火と長とりとは
〜〜山にあるものなればふとを思ひ鬼の心のけ〜めはする
わや

■

凡精霊のいふ火からり火々皆野川小おて麻が〜火と長とりの

ふら〜〜のち〜〜日限の速速あり急中あくに捕らぬと
ゆいへのめ〜〜と見え東山諸守院のま地獄の星
のよ〜〜

■

七月の六ははれぬの道の花うら〜〜くふ〜〜

は〜〜種れあて



は〜〜種れあて

一は〜〜持仏の花いけ〜〜に戸のらまをの事市と
いふもの〜〜

■

七月の八は水の日百六十日な根えり世をす〜〜系縁とす

〜〜は餅おて白とす〜〜の二おあり〜〜



〜〜のめ〜〜

〜〜のけ〜〜系のある謡曲より名づきたるや

のぼんをたけしめて三つふりぬえりむせむ茶震殿の
御門もくまへあり是南門に炎上は別ふりむせむ建びくふ
法人由と眠まねして養候と様ものあり日のゆつ法人のあり
常法あり檜垣の葉とそい又ふつのあり常法も様法と林氏
たふの城の下馬先のやー常法は見えさるふりあま下もそるをこら

廿八

日の御門を入て茶震清涼の御殿等とおすもはらとかく身の毛ふら
心なはゆとあり此城もむら下司のまより今年持中の御を
と踏ふとの御有りはあけのしきよと及ば欣然とくさる候き
美も八の戸津のま渡りも不皇殿すうう杜撰放逸の身もあふ

とくをえし

西所行とらうくの人形と造り造りむめどくあり下の衣へは角
ある竹片ふして白紙とすりよに赤と青との紙と角かこけたり
火の下のるにももひし竹をふらうく下られし紙と角かこけたり
ゆきとまきいむい又中うとゆきもゆきもさげおとんのむ十
六のふりしを色くへ下きりしとまぬぬれちかも若千の竹片あり
私曰東本願寺三所行十三西本願寺
して止ぬえをえき七日七の角堂及び常法守の立を天子の室
祓と祓せらうむのり一日に若ある立を師上京して丹津と押入て
立を甲しと定むの押取と字一席とすいむのり列して平紙

私言立むはまぬるはし相極れはは有れ

あつり小塚山の井とのみの備書小假名かしてまゝなり一紙小紙はちの形
 信田元の假名をありとすん余は神輿の形ふかふ假面と玉の鼻
 と移り橋の山の子はなすまといふ掛するは田中の子の
 神儀うの假面はひをうはくしより名とすむや假面小
 比者の名ともありてうづうづうとくくをけひをう比のあま
 べーはは大神小をありてるものなり

八十六 真葛原土卯北面東より子の流るる千秋なる秋と
 ずらよむし千寿小はうびせ者本造りの白小をせるハ秋例也
 後者々仮例といえり

八十七

うつり小童のの夕とよきと長尺竿のうに結ひせると海
 伊のふのあつれり日らきて蟹舟りもちあしとを海に但一之
 葉は五葉も湯の道にゆきよと替ひぬに三葉は葉の河原へお千人
 伴の備地ともい一つとをありたりかう星の光がまう一紙冊へ
 寄とまてせつけたるもあきと何と掛地とせうるをかへて七月二
 らははうあのお小枕と出いこたは秋二星あまのふよとわぶあまに
 あし小あつれ地とあ五せし出いせうも何うも假名しや



廿四日
 廿五日
 廿六日
 廿七日
 廿八日
 廿九日
 三十日

すはるもふもあり後いづの天王家の伝言のしりはる色大はり
いりて又まに目じまて京大坂共に地券とまきいあり
その色とまじりすてに京郊して小坂すもれあるまふふハ必ス
はみとまき

八十九

門柱の聯は竹とん化り我酒妙く天下妙伴丹雙白價不弱
のぬきまときりきりきりものものに極面減してよあひた
弱の田樂名地し候も又味い文し吟くがなまふた弱一様し
ちるし今ふ好めおの料理しすはし
浪星の振るもあふ世今い流き

大雅堂と稱する安楽山み柿年中長存店に向ひあり是七
八年いざ建一ありしを料理と一り響く尾小大雅堂
の字と篆して家の名付もも信知まき果お遠して人小同小
おしりの大雅堂を指すのしりしにありしがれ海より入るの
あふも奇候ありし一りし大雅堂の名と信知しよふいり後
おもあひ二倍する物おまとの信ありしを山の料理茶をば
しるつまき

九十一

九山の料理茶のありしははけりて内食妻をかりりつまも
何の味とゆひし中氣中痛みのけあ中候ありてはくはる麻
かて料理又よ一果名を記すの振るるありてはきりりいりし山

蘆花りしりあ居あまを法ると尺膳一夏日暑と凌ぐら
むり一保ち所々暮して僅小一軒あり大坂の浮洲へ今移りお島
生ぬへる所川と布あてて是は其々涼しく相公松原お客物く
相公先斗下小も出たありは原を幸客多し夏は鯉鱒あ
らい裡石物と下魚れ若狭と下地小細物ありびとに
は本●裡細大坂よりある魚れ其か腐乱のふり一櫻枝ハ
若狭のあまものもあつてもゆづりいふあま大小者さ
新瓶々の所川にてれもの艘てあまらり一瓶をり若狭の橋
航りしりともは早か川の新魚あま冷くういお中味
か一網の濃漿も白味ゆき赤味ゆきハ一白味ゆきり物

和口より

江戸の魚と取とるて冷く魚一田梨も其白味ゆきとけり
江戸●者の口ハ冷ひが一塩のく煮へ支物と早く煮付又塩
丹りんぬおいらよく早一その威のねくとろび京おいて中は
え一料理をへ大伴をりしりとも七折のりや一塩梅お下り
よき厄下人の土他とろとろ櫻枝ハ大平かろて甚小串を焼て
あまやらうもきり大魚の焼お必しも片身し皿の下り方のか
とて煮ておの料理おきやう大坂も又別のり一京ハ魚おき
一土他おとらるる一大坂おて片身の漬梅お是席お出
すゆいふとやまかのはり若狭と下り貴といふく守のとろ
りむあえん料理おけて江戸は及不魚一び別しと年洞け

小一牛馬を牽てけみし首の傍よと頂々のもてちやさしく委
ありくゆゑなり

一 又て勢を絶するものち東西の牛頓守し東の跡を大佛前なる所川
の傍を越すと境内へ入り即堂は六町有町界概枝小ましく
て小千餘軒小はるる一境内拾町一は方も河邊をけりあふ
即堂の市をり小ハ執事の名と建つ補日西の条のつ菊のつ
ありて築地ツイチと入て持樓堂京新水公取番新陸陀堂開山堂と
出つびけ五の条開山堂大サ三拾七町をり奇麗は況に云治道りは
ふとに五そ一又そ一して一切連續をり凡月午の午流々皆ま小
あはれまふかと疑はる惜しい心を信かくして敷舎の法持を見

さるめ成志をもども 五條の右折小一と寂々たるにいかなり

九十六

又てさるものち棟中をさうして上下の如き氏の社々々の集内
又て其止あるものハ大仏殿の焼跡跡原の表徴也

願城の園小も時あるむ一のあり

又てあやれたものち被カキ恙する女女つき上上の如き如きの如き

又て涼一まもれを紅の巾巾洗井と岩河川の流也

又て雪の毒あやものち中中海連てねひありく碎碎とまると立系

が尻と指出一小信すゆ女

九十七

中中小ハ小葛原より一峰崎をけりまきむいふとらんと
路遠きとらむべし

九六 河鹿川あり山ノ麓大堰川又ハ本江川ノ隈間小てよく

よしあまもつと時辰もやあまハ守に集りて

多岐山ハ今もあまもつと世道神乞多し世道ハ庭を辰五帝ガ

一乳の墓あり去ども辰五帝ノ墓あり又之ハ又御廟野

しいとさう一東西の大谷を立派し

九七 淡谷越ハいつても清水山終ハ海まであるあり一是より山科一

町に大は一の通路ハ藤小東店あり何れもま白まのま

いと縁といふく 私白糸ハ旗あり

百 四心守の松もふし一方ハ杖とハ神事凡古あるありま

とも辛波の松小々中々まづい 此の松とやらは山ノ松と子園山ノ松との
間山ノ松と世道ノ松ハ山ノ松と云あり

九八

鹿苑寺の金剛ハむ古物ハ義海公の像まづく大ハ威ありよ

ま石もな上小若干あり跡ハさう一合圖ハ人の者一人あり

後ハ此ハゆめハ是 持信ハ投すまハ別巻のつと 新圖

寺も又行のあり

切身石の傘々ハ小ハ成りなり 切て中堂右ハ方乃軒下

小なり

九九

大佛の持序も大まもつと切身石の持まもつと 二つとも小路々

ホー取らハ切りてて雅多ハ持の切石の持々 祇園をそと

一と不金

百

大佛殿の持序ハまのまサとるん小まののちと礎と佛のま

往而のり今ハ名也印冷不昔何々々客作と云ふ斗々又耳塚と

スていむうと云ふま大岡御下の山崩と云ふて昔と云ふ

作又昔この町家のつうらある次は忠信の墓と云ふの地

ある昔むいていとありとわがえぬ

三十三石堂の辰世まの流小ちぶとく好む

もよあらのみは々後内度くていと面白く予ハち塚より路次

系にもう一時入地一ゆり也

...
...
...

